

を語る際には、勝手に自分の想像を加へることがあるから、全然あてにすることは出来ないが、精神分析學が今日のやうに發達して來たものはといへば、フロイドたちが、ヒステリー患者の夢などについて、諸方面から研究したのがそのはじまりであつた。

以上が精神分析學の上から見た夢の正體である。從來擱むことの出来なかつた夢も、かくて立派な意義をもつて居ることが明かにされた。もとより、夢の研究は決して以上で盡きて居る譯ではなく、今後ますます發達し、また新しい解釋が下されるかも知れない。いづれにしても夢を見たとき、ただ從來の夢占式の判斷をしないで、その意義を考へて見るならば、其處に自分の心のある姿を、發見することが出来るだらうとおもふ。

物忘れ

「忘れじのゆく末まではかたければ、今日をかぎりの命ともがな。」といふ歌は、人々によく知られてゐる歌で、男の忘れ易いことを歎いて詠んだ女の戀歌である。かやうな場合の「忘れる」といふ言葉は氣の變るといふ意味が主となつて居て、同じく、百人一首の中の「忘らるゝ身をば思はず」の歌の「忘らるゝ」といふ言葉も「捨てられた」ことを意味して居る。そこで私は「物忘れ」といふ標題を

かゝけた以上、當然、この男女の戀關係に於ける「忘却」の心理をも説明すべきであるけれど、元來私には、さういふなまめかしい問題を取り扱ふ資格はないのであるから、「記憶の消失」といふ頗る殺風景なことについて述べて見ようと思ふ。然し何事にも脱線し易い私のことであるから、或は戀愛の問題にも立ち入つて行くかも知れない。

一たい私たちは何故に物忘れをするのであらうか。時としては二三分前にきいたことや見たことさへ忘れてしまつて、われながら呆れかへることが度々ある。ことに、思ひ出さうと思つて、何だか口の先まで出て來て居るやうでありながら思ひ出せぬときは、地だんだみたくなる程じれつたものである。それかといつて、さういふじれつたい目をして思ひ出せなかつたことが、必要のない時にひよつこりと記憶に浮ぶことがある。して見ると「忘れた」といふことは、實はたゞ記憶に浮んで來ないに過ぎないだけで、頭の中にはチャンと、はいつて居るのではないかといふ疑ひが起きて來る。實際、失念の本態が、經驗したことの消失を意味するのか、或は消失はしないで、たゞ思ひだし難いだけのものであるかは、古來心理學者の間にも度々議論されたのである。さうして、人間の一度きいたり見たりしたことは、決して一生消しえないものだと思ふのであるが、私とその説に味方したいと思ふのである。

さて、物忘れの心理を説く前に、私は一應記憶といふものが、どんなものであるかを述べたい。そ

ここで、いま記憶の作用を観察してみると、先づ第一に物を見たり、聞いたりとすると、それを頭の中へきざみ込まうとする作用があらはれる。それを通常記憶力と云ふ。次には、その刻みこまれた印象をいつまでも持ち続けようとする作用があらはれる。それを通常把持力といふ。それから次には、一旦覚え込んだことを後日になつてから、思ひ出す作用があらはれる。それを通常追想力と云ふのである。

そこで、物忘れ即ち失念は一たいどの作用の缺乏によるかといへば、通常把持力のなくなつたことを意味する。けれども、前に云つたとほり、一旦脳裡に刻まれたものは永久に消失しないものだと思へば、むしろ追想力の缺乏といつた方が適當であるかも知れない。

然らば次に起る疑問は、如何なる時に、追想力が働かなくなるかといふことである。が、それを説くに先つて、私は物忘れにはどんな種類があるかを説きたい。先づ第一に、實際に忘れて居るよりも以上に忘れてゐると信ずる場合がある。これは神経衰弱の人に現れる現象であつて、神経衰弱患者は一旦物忘れし易いと思つたが最後、何を見ても、聞いても、覚えにくいと信じてしまふものである。次に、ある期間だけのことを忘れる場合がある。それを通常健忘症と呼んで居る。健忘症には二種類あつて、その期間内のことをうすく知つて居る場合と、全く忘れて居る場合とがある。ヒステリートとか癲癇の患者には、時々所謂朦朧状態が起るのであるが、その朦朧状態で行つたことを、

患者は多くは記憶して居ないのである。又、ひどく酩酊したときなどにも同様のことが起る。

時には逆行性健忘症と云つて、ある時期に意識を失すると、そのすつと前のときのことまでも忘れてしまふことがある。これは屢ばヒステリーの患者に見られるところで、甚だしい時には十年も二十年も前のことをすつかりと忘れ、赤子にかへつたやうな素振りをするこゝさへもある。

これ等の「もの忘れ」は、いづれも病的のものであるが、健全な人でも、老衰して来ると物忘れをし易いのである。一般に小兒の記憶力は大人の記憶力よりもすぐれるものである。十で神童、十五で才子、二十過ぎてはたゞの人」といふ諺は、十歳ぐらゐの時が一ばん記憶力が強く、だん／＼年をとるに従つて、記憶力のにぶることを言ひ表はしたものだと思はる。

さて、私のこれから述べやうと思ふのは、これ等の病的な物忘れや、老衰に伴ふ生理的な物忘れについてではなく、日常生活に於ける物忘れの心理についてである。私たちは、同じ時に見たことや聞いたことでも、甲のことはよく覚えて居るにかゝはらず、乙のことはさつぱり忘れてしまふ。よく、他事に心を奪はれて居るときには物忘れをするが、何度注意して覚えようとしてもなほ且つ忘れることが屢ばある。例へて見るならば、ある人の名前はたつた一度で覚えてしまふにかゝはらず、他の人の名前は度々きいても忘れてしまふ。のみならず、今迄友人として比較的親しく交際して居りながら、何かの機會からその友人の名を忘れてしまふことはしば／＼ある。

かういふ物忘れの心理こそ、ふかき考察に價するのであらう。さうして、この物忘れの心理を明らかにしてくれたのが、前章に述べた精神分析學なのである。即ち精神分析學の教へるところによると、私たちの心に欲しないこと、換言すれば、私たちに不快の感を與へることは、記憶の下積みとなつて忘れ易いといふのである。

有名な「種原論」を書いて進化論を創唱したダーウインといふ人は、いつも研究の際、自分の考へと矛盾した事實は、必ずこれを書きとめて置いたといふことである。即ちダーウインは、自分の考へと矛盾した事實は、自分に不快の念を與へ、従つて、又それを忘れ易いと思つたからである。

ユングといふ人はこんな例をあけて居る。甲といふ男がある女に戀をしたが、女は甲をきらつて、乙といふ男と結婚した。甲と乙とは満更知らぬ間ではなく、それどころか、商賣上の取引をさへしたことがあつたのだが、その一件があつてから、甲は度々乙の名を忘れ、手紙を書くときなどには、乙の名を人にたづねたといふことである。

精神分析學の大立物フロイドが、あるとき結婚後間もない夫婦に御馳走にまねかれた。その時、新婦は、新婚旅行から歸つて間もない時分に起つた笑話を物語つた。どんな話かと云ふに、二人が歸宅した数日後、新婦は姉と共に買物に出かけた。すると街のむかふ側を偶然新郎が通つて行つたが、これを見た彼女は、

「あら、姉さん、あそこを且さんが通つて行くわよ。」と言つた。すると姉は笑つて、

「まあ、何をいふの。あんたの良人ぢやないの？」といつてたしなめたといふのである。

これをきいたフロイドは笑ふどころか、全身がひやりとしたさうである。果して、其夫婦は、その間後もなく離婚したさうである。同じくフロイドの話であるが、ある青年が、その細君と不和になつた。細君がある日買物に出た序に一冊の書物を買つて来て、良人に與へたが、その後その青年が、その書物を見ようと思つて、方々を捜して見たけれど、どこへ置き忘れたのか、どうしても見つからなかつた。ところがある日、別居して居る青年の母親が大病に罹つたので、細君が介抱に行つた。青年が先方をたづねて見ると、細君はまめくしく働いて居たので、青年は大に好きになつた。さうして家に歸つて、何氣なく机の抽斗をあけて見ると、其處にちやんと、先日來捜し求めて居た書物があつた。

かゝることから考へて見ると、戀愛關係に於て、厭になれば忘れるといふ心理を明快に説明することが出来るのである。さうして、昔の人が「嫌はれる」といふことを「忘れる」といふ言葉で言ひあらはしたのは、まことに適切なことだと言はねばならぬ。以上、本題からいさゝか脱線した氣味だが、これだけは云ひ添えておく。

扱、他人に借りたものを返すことも兎角忘れやすいものである。殊にそのものが自分の氣に入れば

入るほど返すことを忘れる。他人から書物などを借りると、つい／＼自分の書棚に立てきりにして、そのまゝ忘れてしまふ類である、Iといふ侯爵が、生前他人の所有した骨董品を借りて来て、愛着のあまり返すことを忘れてしまひ、それが先日遺族の人によつて賣立てられ一時世間の問題となつた。が、あれなどは、故侯爵の忘却の心理が露骨にあらはれた現象と見て差支はなからう。むかし、ある宿屋の亭主が、客に茗荷を喰はせて、荷物を置き忘れさせやうとはかつたところ、どうしたところか、客はやはり荷物をついで歸つて行つた。あとで亭主が、何だか變だと思ひながら、よく考へて見ると、その客は宿賃を拂ふことを忘れて行つたのである。これなども、自らの欲しないことを忘れるといふ、適切な例であるといつても差支はないやうである。

以上のことから考へて見ると、私たちが物忘れをしないやうにしようと思つたならば、そのことを好きになるに限る。といつて、好悪といふものは感情の問題であるから、いくら好きにならうと思つても好きになれぬことがある。従つてこの世の中に、物忘れといふことは永久に絶えぬ譯である。けれど、物忘れが「欲しないこと」から生ずるとわかつて見れば、私たちは、自分の心理なり、他人の心理なりを物忘れによつて、ある程度まで分析し理解することが出来るのである。

強迫観念

前章に私は記憶の障害、即ち「物忘れ」の心理に就て述べたから、次でこれから、その反対の心理、即ち忘れやうとしてもなほ且つ記憶の上にかび上つて来る、強迫観念について説明しやうと思ふ。

こんな話がある。西洋中世に於て、かの錬金術が盛んに行はれて居る時分のことであつた。錬金術とは云ふまでもなく、鉛や水銀や錫のやうな卑金を黄金にかへるといふ頗る虫のよい術なのである。ある日一人の青年がその頃有名な錬金術士をたづねて、是非錬金の祕法を傳授に與りたいと申し出たするとその錬金術士は、快よく青年を實驗室に案内して、さて、一通りその手順を教へてから、最後に「たとひこの通りの術を行つても、それを行つて居る間、犀のことを考へては決して成功しないから、そのつもりで取りかゝりなさい」と、申しつけた。すると青年は「犀といふ動物を私は一度も見ることがありませんから、決して思ひ出さまいと思ひます」と、答へて喜んで歸つて行つた。ところが、一ヶ月程たつてから、その青年は非常に憔悴した姿で、錬金術士の許をたづねて来て云つた。

「誠に申し譯がありませんが、私には到底錬金術は出来ぬものと思ひます。といふのは、どうやつて犀のことを思ひ出すまいと思つても、いざ仕事にかゝると、それが思ひ出して来てならないのです。かうしたことは、私たちの日常生活に於て屢ば經驗するところである。何か癩に障つたことでも、それが二六時中、頭にこびりついて居て、忘れやうと思つても、思ひ出してならぬのである。又、反對に何か面白いことでもあると、二日や三日の間は、そのことに心がとらはれて、ほかのことに手のつかぬ場合がある。女の人が、自分の好きな俳優によつて行はれた芝居を居ると、二三日は芝居のことばかり考へて、御飯をたべる時でも、針をもつときでも、書物を讀む時でも、ついほんやりし勝なことがある。よく、心にわだかまりがあるとき、仕事を手につかぬと云ふが、そのやうな場合は、つまり心の中にある一つの觀念が外へ出て来て、他の觀念を押しつけてしまふのである。一たい私たちの觀念なるものは、外へ出たがりたがるものである。『知れちやいけない二人が中を、かくして置くのも惜しいもの』といふ情歌があるが、人間の秘密なるものが守り難いのも、要するに觀念が出たがるためである。ここに子供のうちは、秘密を守ることが出来ないものであつて、生理學上にも心理學上にも、子供に近い性質を持つて居る婦人は、むかしから秘密が守りにくいといはれて居る。一たび女に秘密をもらしたならば、もはやそれが秘密でなくなるといふことは、有名なドイツの詩人シルレルの詩にも歌はれてあるし、また多くの物語にも書き綴られてあることである。

ところで、私たちは、その出たがる觀念を無理に押へつけねばならぬことがある。さうして言ひたいこと、行ひたいことがあつても、その出来ない時には、所謂潜在觀念となつて、身體の何處かにあらはれ、種々の變態の現象を起すのである。かのヒステリーの症狀なるものは、いはゞこの状態をいふのである。例へばヒステリー患者が、思ふ存分に言ひたいことを言ひ得ないとき、その潜在觀念は熱となつてあらはれることがあるし、又、胃腸の作用を害して不消化を來したりするのである。だから、ヒステリーを治すときは、さうした潜在觀念を殘らず外へ出させるのである。プロイエル氏はこれを談話治療と稱したが、フロイドの精神分析學も、要するに潜在觀念に自己實現をさせて、色色なる變態現象をなほすところにその主眼がある。

日本人が外國へ行くときよく神經衰弱を起し所謂懷郷病にかゝる。俗にホームシックと云つてゐるが、これも私は、思ふことが十分に言へないことに、その原因の一部分を歸したいと思ふのである。勿論ホームシックは、性慾の不滿といふことがその重大な原因をなすのであつて、ヒステリーにも、やはりこの原因は濃厚ではあるが、外國へ行つて語學が達者でないときには思ふことが十分言へず、従つてホームシックが起り易いのである。ニューヨークあたりへ行くと、日本人が澤山居つて、日本語を語る機會が多いのであるが、さもないところへ行つて、而も外國語が十分話せないと強いホームシックに冒されるやうである。

さて強迫観念なるものは、一つの観念が他の観念を抑へつけて、自己實現をしようとする、いはば力強い観念をいふのである。前にも云つたやうに、観念なるものは、自己實現をしたがるものであるが、人間には澤山の観念があるから、それ等の観念は、すべからず共同一致して互に譲りあひつゝ同一目的の實現のために働くべきであるのに、その中の一つの観念がいつも他の観念だけを押しつけて、自分だけがあらはれるといふのが、此強迫観念なのである。かの錬金術士をたづねた青年についていふならば、犀といふ観念が強迫観念なのであつた。尤もこの青年の強迫観念は主として錬金術を行ふときのみ起るもので、いはゞ聯想的強迫観念と云ふべきものであるが、強迫観念の中には、二六時中あらはれるものもあるのである。ナボレオンは道を歩くとき、戸々の窓を數へずには居られなかつた。これも一つの強迫観念である。又、英國の辭典編纂者として名高いジョンソンは、同じく道を歩くとき、道ばたに立つて居る捧抗に手を觸れないでは居られなかつた。一つでも觸れ残すと、わざ／＼あともどりをしてそれに觸れたといふことである。これもやはり強迫観念であつた。實に自分ながら馬鹿々々しいと思ひながらも、やらずに置けないのであつて、かうした一種の癖はお互に大なり小なり必ず持つて居るのである。「なくて七癖」と云ふとほり、輕い強迫観念を持たぬ人はないといつてよいと思ふ。たとへばある人は机の上の品物の排置が少しでも變つて居ると、それが氣になつてなほさず置きけない。又ある人はヘーヤピンが抜けかけるのを氣にして、時折頭へ

手をやらすには置けない。かういふのを俗に神經質といふが、これ等も強迫観念に外ならぬのである。

ジェームスの書物にこんなことが書かれてある。ある大學で、二階の窓から學生が飛び降りて大怪我をした事があつた。ところが他の學生が、その窓のそばをとほりかゝつた時、突然自分もこの窓から飛び降りて見ようかしらといふ観念が起つたのである。するとその観念が強迫観念となり、寢てもさめても忘れられなくなつた。學生は困つてしまつて、どうすることも出来ず、苦しさのあまりに、自分の信賴して居る牧師のところへ行つて打あけたのである。さうして學生は最後に、「どうしてもあの窓から飛び降りたくてなりませんが、いつそ飛び降りて死んだ方がよいでせうか」と尋ねた。かうして質問をうけた場合、普通の人ならば「そんな亂暴なことをしてはいけない」と忠告するのであるが、そんな忠告ぐらゐで、強迫観念は去るものではない。で、そのことをよく知つてゐた牧師は、それに答へて、「それはまことに止むを得ないことだ。一刻も早くその希望を果して死ぬがよい」と云つた。するとこれを聞いた青年は、暫らく黙つて居たが、やがて「能くわかりました。お蔭で死ぬ氣がさつぱり無くなりました」と答へたといふことである。

私たちはよく高いところへあがると、とび下りて見たくなつて仕方がないことがある。さういふものも一種の強迫観念と見ることが出来るのであつて、かやうな「自殺観念」は青年に甚だ多いので

ある。よく模倣によつて、自殺や殺人が行はれるといふが、その本人の多くは、このやうな強迫観念の、いはゞ犠牲になつたものと見ることが出来る。

私は曩に夢の心理について説いたが「夢」も考へやうによつては一種の強迫観念である。理論上から言ふと精神が完全に統一されて居たならば、眠つたときには夢を見ない筈である。ところが精神に多少の障害が起つて観念に不統一を起すと、睡眠中に、働かなくてもよい観念が働いて夢を見るのである。神経が衰弱してゐると睡眠が夢のために邪魔されるのである。神経衰弱にかゝつた學生などは、机に向つて勉強しかけると、色々ほかのことを考へ出す。例へば春先であると、今頃は公園の花はどんなだらうなどと考へて、開いた書物の頁の上に、櫻花の満開した幻想があらはれる。ところがかやうな學生が公園へ行くと、花のことよりも勉強のことが氣になり出してくる。こんなに遊んでゐてはいけないがなど、煩悶し始める。これが即ち精神不統一の證據であつて、それ等はやはり強迫観念なのである。従つて、かやうな人は眠るときにもよく夢を見るのである。

いづれにしても、かういふ強迫観念は精神の統一を缺くときに起るものであつて、若しそれが強度に起つた場合には精神療法等によりて、取り除くより外はないが、軽度の場合は、出来るだけ自己實現を助けてやるやうにすることである。子供が泣くときに、泣きな泣くなといふと、ますます泣きだすけれど、泣け泣けといふと、却つて泣かなくなると同じで、強迫観念なるものは、それを抑へつ

けると、益々増長して活動を續けるものである。

以上私は日常生活に於ける變態心理を、思ひつく儘に述べて來たが、この外にも恐怖心のことであるとか、變態性慾に關係したことであるとか、色々云はねばならぬことがある。殊に始めの計畫では、變態性慾と日常生活のことを主にしようと思つたのであるが、これはまた別の機會にゆづることにする。

女性の異常心理

はしがき

異常心理

題して女性の異常心理といふ。こゝでいふ異常とは、ちよつと異常に思はれるといふ意味で、その實は女性にあり勝な心理状態を片つ端から書いて見ようと思ふのである。従つて、案外に長いものとなるかも知れない。そして、讀者よりも先に私が、退屈してしまふかも知れぬ。すべて、纏つたものを書くには一定の順序に従はねばならぬけれども、興味を中心とした讀物を提供したいといふ私の考であるから、或は、木に竹をついだやうなものが出来上らぬとも限らない。そのつもりで讀んで貰ひたい。

死の悲哀と性的興奮

自分ながら變な題だと思ふ。「性と死」として書かうかとも思つたが、「生と死」の誤植だなどと思はれても面白くないから、かうした面倒な題を選んだのである。要するに、私の述べようと欲するのは人の死を悲しむ心の底から、屢ば性的欲望が起るといふ事實である。而もかやうな性的興奮は、死を悲しむ程度が深ければ深いだけ、それだけ屢ば起り易いのである。これは強ち女性に特有な心理ではあるまいけれど、女性に極めて起り易い現象だといはれて居る。

「物に始めあれば必ず終りあり」とは、大抵の人が知つて居さうなことであつて、死ぬことが人間の終り、生れることが人間の始めだといふこともまた言ひ馴らされて居るところである。が、よく考へて見れば人間の始めは、むしろ性的行爲であるべきであつて、性的行爲（いや性的興奮といつた方がよいかもしれない）と死とが、いはば人間の始めと終りである。別の言葉で言ふならば、戀と異常とが人間の始めと終りである。蜀山人は嘗て大阪の（？）境町を通つたとき、葬式の行列と婚禮の行列とが行き違つたのを見て、世の中は戀と無常の境まち、死んで行くもあり何とかに行くもあり、とよんだといはれて居るが、前記の異常な心理も、要するに人間の始めと終りとの微妙な關係だと説明さ

れて居るのである。佛説何々經といふ、いかめしい書物でも繰りひろげたならば、定めし戀と無常の關係が委しく説かれてありさうに思はれるけれど、生憎手許に無から引用する譯には行かぬ。で私は、ドイツの犯罪學者ウルフエンの言葉をあけて置かうと思ふ。

「生命を捧らへようとする性的慾望と、失はれたる生命を悲しむ感情との間には、極めて微妙な關係があつて、恰も、失はれた生命を取りかへしたいと思ふかのやうに、生命の終りを悲しむ感情は、生命を作り出さうとする慾望を促がすものである。」

換言すれば「無常は戀の媒」となるといふのである。従つて、昔からよくある「石塔の赤い信女」の妊娠する現象も敢て不思議なことではないかも知れぬ。かう言つたとて何も未亡人の妊娠を辯護する譯ではないが、世の中の各種の現象に對しては、心理的にも解釋する必要があるだらうと思ふから、一寸、無駄口をきいたゞけである。で、私はこれから、この特種な心理を例證によつて闡明したいと思ふのである。

文學の中には時折、この特殊な心理が描かれてあるやうである。たしか、ドーデーの小説だつたと思ふが、良人を失つた女が、良人を埋めたばかりの墓場の上で、あだし男に身を任せる話があつたけれど、「英草紙」の「黒川源太主山に入つて道を得たる話」は見やうによつては、この特殊な心理を取り扱つた最も興味ある物語の一つだといつてもよいやうだから、左にその梗概を述べようと思ふ。

後奈良院天文年中羽州象瀧に黒川源太主といふ幻術を修めた物持ちの人があつた。心氣を養ふために近國を旅行して歩いたが、第一の妻に死に別れ、第二の妻は故あつて離別し、第三の妻を迎へてからは金花山の奥に卜居して風流な生活を送つた。

ある日源太主が里へ出ての歸るさに、ある墓地の傍を通ると、素性の賤しくない女が、一つの碑石の傍に植ゑた桃の實生に一生懸命になつて水を遣つて居たり。碑石の前には別に手向の水も花もないので、源太主は、女に向つて「なぜ、その實生をそんなに丁寧に育てなさるか」ときくと、女はあけすけに「これは私の良人の墓ですが、今はの時に、俺が死んでも三年の間は他人と結婚しないやうにしてくれ、實生の桃を塚の前に植ゑて、花がついたら何方へなりと嫁ぐがよいと遺言しましたから、そのとほり植ゑましたが、良人が死んでからまだ二ヶ月にしかありませんけれど、親や兄が再嫁をすゝめるので、早く此桃が大きくなつてくれぬかと、かうして水をやつて居るので御座います。」と答へた。これを聞いた源太主は、につこり笑ひ、世の中の女の心は、口に出して言ふと言はぬとの差こそあれ、みんなこんなものであらうと思ひそのやうに急がれるならば、いつそ三年忌の法要を取越してつとめたらよいでせう。都では誰でもやることとすど教へると、その女は大に悦んで、「いゝ事を教へて下さいました」と言つて、忽ち桃の木を抜き捨て、一禮して去つた。

まさかと思つた源太主は、あまりのことに開いた口が塞がらず、やがて、女の捨て、いつた桃の木

を拾つて歸り、さても世の中には薄情な女もあるではないかと、一伍一什を女房に語ると、女房は「そんな女は例外ですよ」とその女をひどく罵つた。そこで源太主が「俺が死んだら、お前のその若さでは、とても三年間獨りで居ることは出来まい」といふと、女房は益々怒つて「あなたにそんな事を思はれてはくやしい。あなたに若しものことがあつたら、一生獨身で暮します。」と聲を荒けて言つたので、良人も「さすがは源太主の妻だ」と言つて、その日はそれで済んだ。

ところが、彼此と日を送るうち、夫婦水入らずの暮しのこととて「美色は命根を斬る斧」なるか、源太主は重い病に罹つてしまつた。そこで源太主は自分の弟子の二萬の道龍といふ醫師を招いて、治療せしめたが、思はしく治らぬばかりか、女房の心盡しの甲斐もなく、段々悪くなるので、ある日、源太主は重い枕をあけて、「もう俺も愈々死なねばならぬ。それにつけても思ひ出すのは、あの桃の木だ。」と言ふと、女房は涙をうかべ、「私は決して二夫には見えません。そんなにお疑ひになるなら、この場で自殺して赤心を御目にかけてい。」と答へた。これをきいた源太主はうれしさうに笑ひ、「有難いそれで俺も安心して眼をつむることが出来る。俺が死んだら、衣服はこの儘に棺に收め、十日間は必ず棺を家にとめて香を供へ、十日過ぎたら山中の景色のよい所へ葬つてくれ。」と言ひ遺し、そのまゝ息が絶えてしまつた。

女房は大に悲しんだが、致し方もなかつたので、老僕に命じ棺を買はせて良人の死骸を收め、居間

の中央に置いて供養した。醫師の二萬道龍も、恩師のこととて、毎日來て、墓地の用意をしたり、葬式の手順を定めたり、女房に對して、頗る親切に振舞ふのであつた。すると彼女は不思議にも道龍に心を引かれ、遂には、道龍の妻のないのを幸ひに、一三年過ぎたら結婚してもよいとさへ思ふに至つた。

初七日の前日、道龍が従僕をつれて訪ねて來て、先生の遺著はないかとたづねたので、彼女は一二の著述を與へたが、その時、道龍は、御禮を言ひ乍ら、彼女に向つて、「今後はあなたを自分の母としてかしづきたい。」と言つた。これをきいた彼女は、「私はまだ二十五で、年長のあなたから母と呼ばれるのは恥かしい、どうか妹と思つてくれ。」といふ。道龍は笑つて、「自分はまだ獨身であるから、あなたを妹だと言つたら、世の中の人はきつと妙に思ひます。」と言ひ乍ら、定めし夜は寂しからうと、従僕の九郎を残して歸つてしまつた。そこで、彼女は、うちの老僕に命じて粥を煮させ、その間、九郎に酒をすゝめて、それとなく道龍のことをきくと、九郎は、「うちの主人は、とくに妻帯しようとして居られるが、どうも思はしいのがないので困つて居られます。先生の奥さんのやうな人ならよいがと常々言つて居られます。」と告げる。それを聞いて彼女は、「どうせ亡夫の三年がすめば私は再婚するつもりであるから、御主人に告げて下さらぬか」と頼む。すると九郎は、「え、残念な、實はつい此の間主人は婚約して、明後日式を挙げられることになつて居るのです。」とくやしがる。彼女はこれを聞

いて大に驚き、「でもまだ式を挙げられぬ前だから、何とかして取り持つて下さい。」と拜むやうにしたので、九郎は粥の出来るのも待たずに歸つてしまつた。

彼女はその夜一睡もせず九郎の返答を待つて居ると、朝になつて九郎は來たが、主人の言はれるには、師匠の棺が家内にあることであるし、自分は師よりも遙かに劣つた人間であるし、師匠の奥さまの姿を見ては心が迷ふからと思つて他の女と婚約したことであるから、御断りしてくれとのことであると言つた。彼女は愈々心がせまり、「そんなことぐらゐ何でもないのに。あゝ私、どうしよう。」と泣く。そこで九郎は、「それでは、師匠の葬式のことと相談したいから急に來てくれと言つて主人を招き、その上で主人を口説かれてはどうです。」と勧めるのであつた。

九郎の言葉に従つて、彼女は九郎に道龍を招かせ、それからうちの老僕に命じて、棺を下家におろし、自分は喪服の下に美しい小袖を着て、道龍の來るのを待つた。漸く日暮になつて道龍が來たので彼女は亡夫のことをさんぐに悪く言ひ、ある事無い事を告げて、心を盡して口説くと、遂には道龍も心が動いて彼女の意に従ひ、すなはち、吉酒を酌みかはし、寢具の上に對の枕をならべて契を結ぶ段取になつた。

ところが、道龍が床に入らうとすると、急病が起つて、「うーん」といつたまゝ悶絶してたふれた。彼女は大に驚いて九郎に相談すると、「それは大變。主人の持病で一年に一二度ありますよ、生きた人

間の脳髓を熱酒で飲まなくては治りません。その薬は家にありますが、取りに歸つて居ては手遅になります。」といふ。彼女は、「死んだ人の脳髓ではいかぬか。」ときく、「死後四十九日以内の脳髓ならよいさうです。」「よろしい。」「かう言つて彼女は道龍に對して眞心を見せるため亡夫の脳髓を取らうと思ひ斧と松明を持つて下家に行き、棺の蓋をたゞき割つた。

すると驚いたことには、中にあつた死骸は「あーつ」と一つ大きな欠伸をして、むくく」と立ち上つた。「ひやつ」と言つて彼女が斧を取り落すと、源太主はゆるく棺を立ち出で、「その松明で道を照してくれ」と言つて家の方に共に歩いて來た。彼女は恐ろしさに殆んど夢中で歸つて來たが、道龍と九郎は何處へ行つたか姿が見えなかつた。彼女はホツと安心して、甘言を以て源太主をごまかさうとしたが、酒肴や寢具に言譯立たず、おづくして居ると、源太主はこの間中の出來事を何もかも知つて居て彼女に告げ、最後に道龍主従を手で招くと、忽然として空中にあらはれたが、また再び消えてしまつた。即ち彼女が今まで道龍主従だと思つたのは源太主の幻術によつてあらはされた人間に外ならなかつたのである。いふ迄もなく源太主は、彼女の心をためすために假死に陥り、分身隱形の法を使つたのに過ぎなかつた。と、其處へ、實在の道龍が訪ねて來て、「先日師匠は二ヶ月間來るなど仰せられました。丁度二ヶ月過ぎましたから、御機嫌を伺ひに來ました。」と挨拶した。これを見た彼女は、我身の淺間しさを恥ぢて、帯を梁にかけて即座に縊死を遂げた。

以上が、この物語の梗概である。作者の近路行者は、この物語のはじめに、「しかれども、女は生活の業を知らねば、或は親の意に従ひ、又は子の不便さに引かれて心の外に兩夫に見ゆるものあり。又天性の淫婦あり、丈夫の在りても、偷漢の悪事、其ほか如何敷ことどもあれども、夫は閨中の愛に溺れ、枕上の言に迷うてさとりせず、婦の言によりて、不孝とも不忠ともなるもの、高明の人にも多くこれあれども、達者豈しからんや。」

と書いて、女の甘言に迷はされざる達者の例として、黒川源太主のことを書いて居るやうに見えるが、單なる女の「水性」を描く外に、なほ一層突き進んで、殆んど無意識的に起る女子の性的行爲を描いて居るのは頗る興味ある點である。良人の死を悲しむ最中に、而も良人の死體を前に置いて、はげしい性的興奮を覚え、遂には情人のために良人の死體をも犠牲にしようとすることは、女性の異常心理を研究する上に、最も注意すべき事項の一つであらうと思ふ。

讀者は恐らく、かやうなことは小説に許されるだけで、實際にはあり得ないことだと思はれるであらうが、これに似た實例は決して少くないのである。左に小アジアの舊都エフェズに起つた一件を紹介しよう。

ある美しい若い女は、良人の病死に逢つて悲痛措く能はず、親戚や朋友が、何とかして慰めようと思つても、彼女は泣いて泣いて泣きあかし、「多情多恨」の文句ではないが、「死顔の覆ひを取つては、

棺桶の蓋を取つては、あなたは何故死んだ、死ぬといふ法はないと、悶え悶えて絶叫し、良人の死體を収めた棺が共同墓地に運ばれてからも、彼女は棺を抱いて嘆き悲しみ、人々が棺を埋めようとしてもきかず、三日三夜墓孔に坐つて、大聲をあけて泣きわめいた。

丁度その時、同じ墓地の程遠からぬところに、一人の軍人が、ある死刑囚の絞殺死體の見張り番をしつゝあつた。その土地の風習によつて罪人の死體は一定時日公衆にさらすことになつて居たからである。夜になつて、その軍人が耳を澄ますと女の頻りに泣きわめく聲がしたので、重任を受け持つて居たものゝ、半ば好奇心、半ば同情心に驅られて、ひそかに聲のする方に近よると、件の女が棺を抱いて泣いて居るので、彼女の身體に手をかけてどうして、そんなに嘆くのですかとたづねるのであつた。

それから二人の間にどんな會話が行はれたかは、讀者諸君の想像に任せるとして、兎に角、彼女は男のやさしい言葉に發作的の性的興奮を感じたものか、可愛い、良人の棺の上で、二回その身を任せてしまつた。

思はずも時を過した軍人は、はつと我に返つて、わが身の重任を思ひ出し、あたふた、もとの所へかへると、こはそも如何に、彼の留守中に、罪人の死體は、罪人の親戚のものたちの手によつて、盗み去られて居たのである。彼の今迄の歡樂の心は忽ち恐怖の心に置き換へられた。彼は、ほかに訴へ

る先もないので、忽ち引き返して彼女に事の次第を告げると、男に身も心も捧げた彼女は、男の危難を救ふために、忽ち棺の蓋を開き、良人の死體を抱き上げて裸にし、軍人と共に運んで、今までの死刑囚の死體の吊してあつたところへ、その代りとして吊したのである。……

これは決して作り話でなく、懸値のない事實談である。良人の死體をして死刑囚の死體の代用をせしむる残酷さは、「英草紙」の女が、男の病氣を救はうとして、良人の腦髓を取り出さうとした残酷さと、頗るよく似寄つて居ると思ふ。かやうな、一見不可解と思はれる心理が女性に存在することが、昔から女性の「謎」と考へられた所以でもあらう。キツシユの記載した所によると、ウィーンのある女は良人のあるにも拘はらず、實父の死に逢つた時、父が息を引きとるや、否や停車場に走つて情夫の來るのを待ち受け、それから共に旅館へ行つて泊つたといふことである。

最近、新聞紙の報ずる所によると、關西の某文學者の夫人は、ことし四十二歳の美人であつて、良人ととの間に十二人の子を儲けて居りながら、二十五年に亘る愛の生活を捨て、書生をして居た二十三歳の男と家出したといふことである。彼女は今年十七歳になる長男を失つたが、次男はまだ僅かに四歳であるので、その悲しみは甚大であつた。彼女は長男の病氣の際書生と二人で看護し、書生の親切に強く心を打たれた。加ふるに良人は職掌柄、家を明け勝であつたため、遂に道ならぬ戀に陥つたのである。

新聞記事だけではもとより、裏面の複雑な事情はわからぬけれど、私は、この事件も、死の悲しみから生じた性的興奮の一例であると解釋したのである。而もかやうな戀は、前記の例に見る如く物凄程熱烈であるから、或は當分、圓滿な解決を見ることは六ヶ敷いかも知れない。新聞紙の報ずる所によると、夫人と書生とは北海道に住所を定め、人々が歸宅をすゝめても、「歸る位なら死ぬ」と言つて居るそうであるが、それは單に世間體を憚る意味ばかりではなからうと思ふ。かやうな場合、戀に狂ふ女は「死」をも敢て辭さないばかりか、極端な犯罪をも仕兼ねないのである。私は夫人が家出の二日前に、長男の骨を収めた寺でよんだ俳句を掲げて、この項の結末とする。

呪はれて死ぬ嬉しさの涼しけれ。

美貌を欲する心

「天公萬物を造るに巧拙あり、そが中に女子の醜きばかり、世に幸なきものはあらず、しかはあれ、美人かならずしも賢なるにあらず、醜婦かならずしも愚なるにあらず、彼いかなれば人に憎まるゝこととのいと深き、孟光が伯鸞に嫁り、義遠が板額を娶りたる、或はその賢に愛で、或はその勇を慕ふ、かゝる奇耦は亦稀なり」とは、「新累解脱物語」にある馬琴の美醜論である。まことに女と生れて容貌

の醜い程不幸なことはない、「美人薄命」とは昔からの通り相場であるが、「醜婦薄命ならず」とは誰が保證し得やう。加之、たとひ薄命でもなほ又薄々命でも、ちつともかまわぬから、美人となつて見たことは、恐らく、凡ての女の心に潜む欲望であらう。「玉耶經」に「女人の法、容貌の端正なるものを美人と名けず、たゞ心行端正にして人に愛敬せらるゝものを美人と名く」とあれど、心行端正なる上に容貌端正ならば、これにまさる美人はない筈。況んやロムブロー一派の犯罪人類學者の調べたところによつて、女性犯罪者には概して醜貌のものが多いと知つたら、愈よ美貌は尊いものとなつて來るのである。

さりながら、戀愛の世界に於ては醜貌必ずしも絶望ではないらしい。だからバルザックは Recherchede l' Absoluの中に、「美はしからぬものは幸福だ。蓋し戀愛の王國は彼等に屬して居るからである」と述べ、その理由として「美しい女の純肉體的魅力には限りがあるけれど、さほど美しからぬ女の純道徳的魅力には限りがないからであるらしい」と説き、スタンダールも De l' amourの中に「人は段々苦勞をすると、醜貌を選んで愛するやうになる」といつて居る。實際世間を見渡して見ると、さういふ例には乏しくなく、ルツソーもやはり同様なことを言つて居たと思ふ。

然し、女子の醜貌に就てのかやうな辯明は、多くは男によつてなされて居るだけで、美しからぬ女自身に取つては、その顔は可なり氣になるものであるらしい。従つて時には醜貌を恥ぢて自殺するも

のさへある。「私は醜貌であつたが爲に、人から見離され、世の中の不用物であると感じました」とは、ドイツのある若い女が自殺を決して物した遺書の一節である。人から見離され、世の中の不用物であると感じて、而も自殺の道を選ばないとしたら、その女は如何なる行動に出づるであらうか。ことにその女にして、性的興奮が甚だしかつたならば、勢ひ、世間一般の男子に對する復讐心が旺盛となつて、毒殺とか、匿名書簡の發送などの犯罪を行ふに至るのである。生れつき醜い容貌を持つたものは兎に角として、比較的美しかつた女が、所謂月経閉止期にはひつて、醜くなりかゝつたとき、その心に受ける打撃は、到底男子の察し得べからざるほど大きいものであるらしい。犯罪學者はこの時機を女性に取つての「危険期」と呼び、カーリン・ミカエス女史の如きは、その著「危険な年齢」の中に四十歳から五十歳に至る女子の頭の中には、あらゆる「罪惡的」な考が充ち満ちて居ると書いて居る。イーヴェット・ギルヴェールもその小説 *Les demi-vieilles* の中に、この期の女の心持ちを書いて、「彼女たちは若くならう、醜くさをかくさうとつとめ、も一度戀愛に陶醉したいと思つて居る」と述べて居る。不老長生は男女を通じての希望であるが、女性にとつては、不老長生でありたいといふことは、若く美しくありたいといふ意味に外ならぬ。年をとるに従つて戀愛の術に長ずるは自然の理であるから、戀愛に陶醉したい欲望は年若いものより遙かに大きい。然るにその顔貌が漸く衰へるとあつては、自然焦燥せざるをえない譯になる。「妊娠の恐れのない時期には、快樂は大きい」といつた

極端論者の説をまたずとも、クリマクテリウムの女が、如何に美しさを保ちたがるかは、充分察し得られると思ふ。ことにこの期に性的慾望の異常に亢進するものが少くないから、美しくなりたいと思ふ心は、時として極端になることがある。その昔ネダスデー伯爵夫人が、六百人の少女を城内へ連れこんで殺し、その血に浴して永遠の美を保たうとしたことも、強ち「狂氣」だけで片附け得られないと思ふ。ドイツあたりの死刑場のまはりに、犯罪者の血を買ひに集るものゝ中、女がその大半を占めて居ることを考へて見ると、一層この間の消息をはつきり理解し得るが、更に私はこれから、第十九世紀の半ば頃、英京ロンドンで有名になつた女美容術師マダム・レチエルの犯罪を述べて、如何に女性に美しくなりたがるものかを、讀者に傳へようと思ふのである。

X

X

X

西曆千八百六十年頃、英京ロンドン、ボンド街のとある店のガラス窓に、

BEAUTIFUL FOR EVERY!

と書かれた金文字が道行く人々、ことに婦人の注意を促がした。それは先年、スタイナツハ氏若返り法手術の新聞廣告が人目を引いた以上であつたらしく、そのガラス窓の奥に陳列された各種の途方もなく高い値段の美顔請合液は、何んとかドラツクの蠟細工以上の印象を月経閉止期の婦人に與へたらしかつた。この店こそは、マダム・レチエルの「美顔院」であつて、美顔院主たるマダムは、なにが

し貴族院議員の一萬圓貯金法に劣らぬ手段によつて、美しくならうとする女から、思ふ存分に金を搾り取つたのである。

マダム・レチエルは當時六十歳の猶太人である。美顔院主に似合はず、誠に不細工な身體をした御多福で、馬琴ならば「異國にしては宿瘤無鹽、わが皇國にしては丹後の竹野姫、城資盛が姨母板額なども、かくまでにはあらじと見ゆる醜女」と書いたかもしれぬ程の、したゝか者で、たゞその兩眼だけが、慾の深い猫のやうに輝いて居たといふことである。冷静に考へたら、そんな女の手では美顔術も糸瓜もあつたものでない筈であるのに、美しくなりたいの一念で癡り固まつた女は、高いお金を出して、せつせと通ひつめ、而も常に門前市をなしたといふのであるから、この道もまた「思案の外」といつてよいかもしれぬ。彼女はもと赤貧洗ふが如き家に生れ、後に二人の男と結婚したが、始めの良人には死に別れ、後の良人には捨てられ、貧乏のどん底にさまよつて居る時、ふとしたことから、彼女はこの素破らしい職業を思ひつくに至つたのである。

その「ふとしたこと」といふのは、彼女が悪性の熱病にかゝつて病院に入れられ、その大切にして居た髪を剃らねばならぬ破目に陥つたことである。顔こそ醜くけれ、その髪は黒く房々として彼女の唯一の寶であつたから、たとひ病氣のためとはいへ、それを剃り落すことは、恐らく腕を切り取られるよりもつらかつたであらう。で、醫師はその心を察して、「毛のすぐ生へる薬をあけるから御剃りな

さい。これをつけると、前よりも一層毛の色が美しくなります」といつて彼女を慰めたので、彼女も澁々ながら承諾したが、果して、その薬をつけると、毛は迅速に生へ、しかも前よりも一層房々と伸びた。彼女は大に喜んで醫師に向ひ、その薬の處方を金を出して懇願したほどであつた。

彼女のこの経験は、彼女をして美顔術師となる決心をせしめたのであつた。即ち彼女の鋭い頭は、女が美しくなりたがる心を利用したならば、極めて容易に金を作ることが出来るといふ見込を附けたのである。そして彼女が美顔術なり美顔液なりは、高價なほど却つて多く需要があるものだと思へたのは、誠に感服に値するところであつて、女ながら醜名を後世に遺すものは、やはり、どこかにたゞの人間とちがつたところがある。すべて請合液にしる、請合薬にしる高く賣れば賣る程需要は多いので、彼女の賣り出した石鹼は一個實に二ギニー即ち約二十圓、Water of Life は一瓶約三十圓、ジョルダン水と稱する美顔液は實に小瓶百圓、大瓶百五十圓といふ恐ろしい値段であつた。

このジョルダン水については面白い話がある。彼女はいつも客に向つて、「東方」から来た美顔の秘薬であると告げて居たが、後に彼女が裁判されたとき、検事が彼女に向つて「東方」とは何處を言ふのかときくと、彼女はすました顔で「ワツピング」と答へた。ワツピングとは、彼女の店のあるボンド街の東方に當るロンドンの一區域である。これをきいた滿廷の人々は一時にどつと笑つた。そこで検事が更に、

「でも、其方はジオルダン水と名けて、聖地から来たやうに見せて居るではないか？」と訊ねると、彼女は答へた。

「そんなつもりでは毛頭ありませんよ。オー・ド・コロニーでも、必ずしもコロニーで出来たものとは限らぬではありませんか……。」

小瓶百圓のジオルダン水がこれであるから、他は推して知るべきであるが、そのあやふやな化粧品に對して、惜氣もなく大金を投ずる女の心は、請合樂に大金を投ずる肺病患者の心と等しく眞剣であることを忘れてはならない。實に美しくなりたいと思ふ心は、その愚を笑ふことの出来ぬほど、その女に取つては眞剣なものである。

彼女は客が金を持つて居る間は出来るだけ愛嬌を振りまいたが、一旦金が無くなると知るなり、その態度はがらりと變つて、残忍冷酷な女鬼の本性をあらはした。ある日、某といふ中年の未亡人が、その失はれんとした美を取り返すべく、彼女の店をたづねると、彼女は快く迎へて言つた。

「まあ、本當によくお出で下さいました。きつと美しくしてあげます。その代り千ギニー（一萬圓）頂きますがよろしいですか？」

あまり金持ちでない未亡人は、びつくり仰天した。

「まあ、そんな大金を！ 私にはその四分の一も出せません。」

「御氣の毒ですな。」とマダム・レチエルは云つた。「でも、私の美顏術は、家傳の祕法ですから、お高いのです。千ギニー頂いても、差引ほんの僅かしか残りません。それにやすい料金にしますと、中流の人まで澤山来て、自然にこの祕法がばれてしまひますから、己むを得んのです。然し折角御出で下さつたことですから、半額の五百ギニーにまけて置ませう。」

数日の後、その未亡人は、朋友たちから借り集めた五百ギニーの金を携へて店をたづねた。美顏術はそれから一ヶ月間に亘つて施され、入浴、按摩軟膏の塗擦、その他何々と、朝から晩まで未亡人は薄暗い室で、マダムの祕術を受けたのであるが、その顔は少しも美しくならなかつたので、未亡人は悲しげな顔をして五百ギニーの返還を申出た。

「まあ、何といふづうくしい女だらう。」と、マダムはその猫のやうな眼を光らせて言つた。

「さあ、すぐに出て行つて下さいよ。お前さんの出した料金なんか、みんな費用にかゝつてしまつたのに、それを返せとはよくも言へたもんだ……。」

「嘘です、嘘です。お前さんは詐僞師です。お金を返してくれなさいや、その筋へ訴へるからさう思ふが……。」

「何？ 訴へる？ フン、訴へて見るがよい。却つてこつちの廣告になるから、たんと訴へておくれ。だがね、よく物事は考へてからするものだよ。狎のくさめしたやうな顔をして居ながら、大金を

出して美顔術を受け、あけくに美顔術師を訴へたときいたら、國中の人がみんな吹き出してしまふわさ。さあ、く、く、遠慮なく辯護士のところへお出で。先刻から、わしは可笑しくて可笑しくて腹の皮がよれ切れさうだよ、わつはつは。」

未亡人はすくなくと歸つてしまつた。もとより訴へる氣力はなく、まだ外にもかうした泣寝入に終つた女は少くなかつた。さうしてそれと同時に、マダムの財布はだんくくとふくれて行つた。

然し彼女の飽くことなき貪慾は、美顔術の収入だけで辛抱することが出来なかつた。ある日ウエスト・エンドの富豪街に、その人ありと知られた某氏の夫人が、近來健康を害してその容色の衰へたのを憂ひ、良人に内密にマダムの店をたづねた。中年の彼女は、良人の知らぬ間に美顔術を施し、以て良人を驚かし樂しませようと欲したのである。マダムは例の如き甘言を以て、少女のやうに若返る旨を保證し、高價な料金を請求して、入浴その他手順を定めた。

新客と對談しつゝあるとき、マダムの鋭い眼は、客の指に輝いて居る寶石入りの指環にそゝがれ、いつしか彼女の心の中に、あの指環を我ものにしよといふ恐ろしい慾望が浮んで居た。で、ある日、マダムは、客が湯に入つて居る間に、脱衣場に置かれた指環を盗んでしまつたのである。

やがてはけしいベルの音に、マダムが浴室にかけつけると、某氏夫人は顔色をかへて云つた。「大へんです、指環を盗まれました。」といつて、マダムの顔を見た夫人は、マダムの所爲と直覺して

語調を強めた。

「ねえ、お取りになつたのはあなたでせう。さあ、返して下さい。」

「な、なんだつて？」とマダムは齒を鳴らした。「よくも人を盗人だといつたな？ お前は何だ。亭主の眼を盗んで、氣まゝなことをして居るぢやないか。何なりと言ふがよい。その代り、わしもお前の亭主に、お前が毎日此所へあひびきに來たと話してやるよ。さあ、早く出て行つてくれ。二度とその見苦しい顔を見せてくれるなよ。」

マダムの犯罪はなほこれだけではなかつた。彼女は、一旦店をくぐつた容の金を最後の一錢まで、搾り取らねばやまぬ決心をして居つたので若し客が、途中で彼女の美容術に不満を抱いて逃げようとする、彼女は、皮膚を荒らす薬品、例へば鹽酸、巴豆油など、使つて、客の顔を醜くし、途中でやめるとこの通りだとおどしていつまでも引張るのであつた。ある時はまた所謂「惚れ薬」を賣つて法外の代價を拂はしめ、なほ進んでは、男の取持ちをさへ敢てした。

美容術を受けようとする女、ことに未亡人たちが或種の飢餓を覺えて居ることを知り抜いて居たマダムは、この弱點を利用して、更に私腹を肥さうとしたのである。さうした良へ飛び込んだ女は數多くあつたが、その中でも最も氣の毒な目にあつたのは、ミセス・ボラデルといふ未亡人である。即ち彼女はマダムの美顔術を受けつゝあつた間に、當時獨り身であつたレーンレー卿に紹介され、幸福

にもレーンレー卿から、マダムを介して結婚の申込を受けたのである。その實、レーンレー卿は、ある日彼女の店の前を通つたばかりで、所謂だしに使はただけであつて、その後ボラデル夫人のところへマダムを介して渡された艶書は、卿の替玉が書いたのであつた。かくてマダムは、高貴の人と結婚するためには、寶石も無ければならぬ、相當な衣裳もなくてはならぬと、思はぬ幸福に有頂天になつたボラデル夫人をそゝのかして、色々ものを買はしめ、それを結婚の日まで、自分の手許に預ることにした。さうして愈よボラデル夫人が一文無しになつたのを見すましたマダムは、遂に金の金銭上の契金不履行を廉に、ボラデル夫人を訴へたのである。

ところが、この訴訟は却つてマダム・レチエルを不利の位置に陥れた。ボラデル夫人の友達かねてマダムの毒手をにくんで居たので、逆にマダムの詐欺的行爲を訴へ出て、その結果マダムの罪狀が明らかとなり、遂に裁判されるに至つたのである。

裁判の結果マダムは五ヶ年の懲役に處せられた。人々は美顔院に集つて、多額の金を搾り取られた女たちの愚を笑つたが、五年の刑期を終へたマダム・レチエルが再び同じ所に美顔院を開くと、美しくなりたいたいで一ぱいの女たちは、又もや、蜜に集る蟻のやうに、その家に入出入りして、却つて以前にも増して店は繁昌し、マダムは相も變らず、不正な手段で、その腹を肥した。その結果再び司直の手にあけられ、更に五年の懲役に處せられたが、刑期を終らぬ先に彼女は獄中で死亡した。

マダム・レチエルの犯罪は、所謂危険期に於ける女性の異常心理を巧みに應用したのに過ぎぬけれども、その異常心理、即ち美しくなりたいたいふ心が、如何に強いものであるかは、前科者の彼女が開いた美顔院が、依然として繁昌したことでもわかる。

この心は前に述べた如く、彼女自身もつゞ／＼経験したところであつて、醜婦に共通なサヂスチツクな心は、遂に彼女をして、犠牲者の無一文になつて困む姿に異常の快樂を覚えしめたのである。即ち彼女の犯罪の動機には、貪慾の外に「サヂズム」を認めなければならぬ。美しくならうと欲して而も美しくなれないとき、女の心は、知らず／＼残忍性を帯びて來るのである。これを思ふにつけても、何とかして本當に效力のある美容術を唯かゞ發見してくれ、ばよいと思ふ。

卑しきを慕ふ心

俗に「いかもの喰ひ」といふ言葉がある。これは食欲に就ても、また性慾に就ても意味の通ずる言葉であつて、食欲の方面に於けるいかもの喰ひが男性に多く、性慾の方面に於けるいかもの喰ひが女性に多いのは、注意すべき現象である。憐れなるもの、卑しいものに對し性的の愛慕を覺ゆること、ドイツ語では Sehnsucht nach der Fiefe といひ、フランス語では nostalgie de la boue といふ。これ

あるがために、上流の家庭にいまはしい悲劇が起り、やれ運轉手とどうの、やれ書生とどうのと、新聞が賑かになるのである。

あながち上流とはいはず、何流の家庭にもかうした現象は避け難く、ステークルの言ひ草ではないが、「女の感情生活はマドンナと遊女の間を振り子の如く往き來する」ものであるから、機會と條件とが備はれば、この特殊の心は猛然として頭を擡げ、女性をして恐ろしい悲劇の中に走らしめるのであつて、この心は、いはゞ癌腫の如くに、われとわが身を破壊せんとするのである。

エミール・ゾラはその作「ル・トラヴァイエ」の中に、ある工場主の夫人が、油染みた勞働者によつて、忘れられぬ戀の記憶を得たことを書いて居るが、井原西鶴の「五人女」の一人おさんが、大經師たる亭主の留守に、召使の茂右衛門と戀に落ちたのも、やはり、主としてこの心が働いて居たと觀察出來ぬことはなからう。女中のりんが茂右衛門に戀しておさんに艶書の代筆を頼むと、初めは鼻であしらつて居た茂右衛門が、ついで引き込まれて、逢ふ瀬の時を約するに至つた。おさんはいたづら心からりと寢所を取り換へ、茂右衛門を驚かしてやらうと取り計らつたが、いつの間にか眠りに落ちて、はつと思つて眼が覺めると、取り返しのつかぬ有様になつて居た。かくなる上はと決心したおさんは、遂に茂右衛門と共に墮落するに至つたのである。

いたづらがかうじて誠になる例は世に數多いけれども、おさんの心に遊女氣質がたつぷり見られる

ことは、たゞに元祿時代の女性心理を代表して居るばかりではなく、いつの世にも變らぬ女性の異常心理を代表して居るといつてよい。墮落ちに出た二人は、先づ近江の國へ行き、湖のふちに、わざと遺留品を残して置いて、入水して死んだと見せかけ、ひそかに水をくゞつて丹後の山奥に身を隠すのであるが、狂言入水の計畫を、茂右衛門が建て、おさんがそれに賛成して居るやうに書かれてあるのは聊か物足りない。

これはやつぱりおさんに發企させたかつた。何となれば、複雑なそれで居て、見え透くやうな狂言は、女性がたくらむにふさはしいからである。

然し、丹波路にはひつて柏原といふ所に居る茂右衛門の姨の許に立寄り、おさんを自分の妹だと告げると、その姨から息子の嫁になつてくれとせがまれたときの、おさんの態度は申しぶんなく描かれ居る。その息子といふのは、「其様すさまじや、すぐれてせい高く、かしらは唐獅子のごとくちゞみあがりて、髭は熊のまぎれて、眼赤筋立て光つよく、足手其ま、松木にひとしく、身には割織を着て、藤繩の組帯して、鐵砲の切火繩、かますに兎狸を取入れ、是を渡世とすると見えける。」といふ、その名も岩飛の是太郎と云ふ、悪人で醜男たる獵師である。

「都衆と縁組の事を母親に語りければ、むくつけなる男も是をよろこび、善はいそぎ、今宵のうちにと、鬢鏡取出して面を見るこそやさしけれ。母は盃の用意とて、鹽目黒に口の缺けたる酒徳利を取り

まはし、筵屏風にて二枚敷ほどかこひて、木枕二つ薄縁二枚、横縞のふとん一つ、火鉢に割松もやし
て、此夕一しほにいさみけん。おさん悲しさ、茂右衛門迷惑、かりそめの事を申出して、是ぞ因果と
おもひ定め、此口惜しさ、又もうめきに近江の海にて、死ぬべき命をながらへしとて、天われをの
がさすと脇差取て立つを、おさん押とめて、さりと短し、さまざま分別こそあれ、夜明けて爰を
立ちのくべし、萬事は我にまかせ給へと氣をしづめて、其夜は心よく祝言の盃取りかはし、我は世
の人の嫌ひ給ふひのえ午なると語れば、是太郎聞て、たとへばひのへ猫にても、ひのへ狼にても、
それにはかまはず、それがしは好みて青蜥蜴を喰うてさへ死なぬ命、今年二十八迄蟲ばら一度おこら
ず、茂右衛門殿も、是にはあやかり給へ、女房どのは上方そだちにして、物にやはらかなるが氣には
いらねども、親類のふしやうなりと、膝枕してゆたかに臥しける。悲しき中にもおかしくなつて寢入
るを待ちかね。又爰を立ちのき、なほ奥丹波に身をかくしける」

おさんのこの場の取り計ひは誠に上出来である。若し彼女が「卑しきを慕ふ心」に徹したならば、
或は茂右衛門を捨て、是太郎に赴いたかも知れぬが、彼女の心はそれ程に徹底したものではなかつ
た。

然し、たとひ方便とはいへ、祝言の盃を取りかはすところ、彼女の心の娼婦型であることを寫し
得て餘りあるといふべきであらう。

「卑しきを慕ふ心が」極端になると、不具や醜悪なる男に、愛着を感じるに至ることがある。自分の
戀する男を他人に取られまいとするために、わざ／＼不具となして、一層の愛を注ぐなども、この卑
しきを愛する心が與つて力あるものと認むべきであらう。

フランスの犯罪史上で名高いグラール未亡人が所謂「若い燕」を得て、その燕が彼女の手から逃げ去
らないやうにするために、むかし自分に戀をしたことのある正直な軍人あがりの男をそのかして、
「燕」の眼に硫酸を注ぎかけしめたのも、その「燕」を永久にわがものにしようと欲する心の外に、
不具者を愛する心の強かつたことを認めることが出来よう。彼女は女優になつたり、雑誌記者になつ
たり、色々な商賣に手を出したが何一つ成功せず、遂に賣春婦に身を落してはじめて好成绩(?)を
擧げることが出来た。その容貌は美しく、その性慾ははげしく、はじめ彼女は男を籠絡することにの
み興味を持ち、一度も眞實の戀を感じたことはなかつた。

ところが、中年になつて、だん／＼容貌が衰へ、頭髮に白髪がまじるに至ると、自然彼女に近づか
うとする男が少くなつた。嘗ては手玉に取つた男たちも、今ははや見向きもせぬやうになつたので、
彼女は頗る狼狽し始めた。で、古い艶書を種に強請を行つたり、投機に手を出して金を得ようとして
めたけれども、ことごとく事、志とちがつて、遂に貧困の底に沈まねばならなくなつた。
さうしたところへ彼女はある舞踏場で、一人の青年と知り合ひになつた。

彼女は、その時、四十近い年増、青年は二十歳であつた。數回相逢つた末、青年は遂に彼女の「若い燕」となつたのである。さうして彼女は、その青年を我が身から離さないために、青年を不具として一生涯傍に付き添つて居りたいといふ望みを起し、色仕掛で軍人あがりの男をそのかし、青年の眼に硫酸を投注せしめたのである。

「卑しきを慕ふ心」が、かくの如き中年の婦人に多いことは事實である。ことに夫婦生活に於て良人が冷淡に振舞ふとき、不具者や醜男の熱烈な愛を豫想して、それに赴くのは或はやむを得ない事かも知れぬ。日常良人に征服されつゝある女が、卑しい者を得て、それを自由に征服して見たいと云ふのは無理もない話である。ウルフェンの記載する所によると、ある文士の妻は、離別された後、頻りに復縁を願ひ出で、遂に再びもとの鞘に収まつたが、日ならずして良人は微毒に感染した。女の白状するところによると、彼女はわざと微毒にかゝり、それを良人にうつして、良人を介抱し、永久に良人をわが手から離すまいと計畫したのである。

ロムプロゾーも、あるヒステリー性の女が、良人に冷淡にされ、その復讐のために、怪しげな街に出て、男を誘ひ、微毒にかゝる機會をさがしたことを記して居るが、この場合には復讐以外に、良人を我ものにした。良人の愛を得たいといふ心のあることをも、認めねばならぬと思ふ。

性的早熟

「わたしや今死にまする、お絹様といふお方があれば、所詮女夫になられぬ此の世、必々未來では年穿鑿せずと女夫になつて下さんせ、お前より先へ死んで、あの世へ早う生れたら、老女房と嫌はりよかと、わたしや夫を案じます」とは、「桂川連理柵」に於ける十四歳のお半の述懐である。三十八歳の長右衛門は一家の戸主で、養子の身分だから妻もあり、なほ又養父母もあつたがお半は隣家の娘で親類同様の心易さ。伊勢參宮の歸りがけに石部で仇枕を交し、長右衛門は非常に後悔したが、お半は男の情を忘れることが出来ず、妊娠五ヶ月の身の振方に困つて自殺を決したとき、この言葉を吐いたのである。一方長右衛門も義理の立たぬことがあつて、申譯のため自殺を決した矢先であるから、お半の遺書を見て桂川に赴き、水死したといふのが、この淨瑠璃の荒筋である。

實説によると長右衛門は、お半の分娩するまで、丹波の親族に預けるつもりで、彼女を伴つて夜分家を出たところ、途中二人は盜賊のために絞殺され、盜賊はその罪跡を晦ますために、兩人を桂川に投じて心中の如く見せかけたといふことであるが、實録にしろ、淨瑠璃にしろ、お半が早熟な女であつたのは明かである。尤も十四歳で妊娠するのは、決して異常な例でなく又彼女が果して生理的に、

文字通りに早熟であつたかどうかは知るに由ないが、淨瑠璃作者の描いた彼女は心理的には、たしかに早熟といつてよい。前掲の彼女の言葉から察してもさうであるが、彼女が長右衛門の情を忘れ得ないで死を決するところなどは、性的早熟の女の特徴といつてもよいのである。

性的早熟は、生理的又は心理的に、先天的に生ずる場合と、主として環境の影響によつて生ずる場合とがある。先天的に生ずる早熟は一種の不具と見做すべきであつて、少女でありながら、生殖器や骨盤が發育し、乳房も大きく、月経もあり、恥毛腋毛が發生して居るものをいふのである。かやうな性的早熟には、佝僂病や卵巣腫瘍等の病的現象を伴つて居る場合が少なくなく、一面からいへば、さういふ病的現象の存在するために早熟を起すものだといひ得るのである。

性的早熟は、勿論男子にも見られるところであるが、女子にありては月経の現象があるために判断がつき易い。ゲルバルドが文獻をあさつて蒐集した五十四例の統計を見ると、中には生後二週間で月経の始まつたものがあり、満一年で始まつたものが五人、満二年で始まつたものが四人、満三年で始まつたものが六人といふ有様で、その多くは既に月経の起る前に乳房が發育し、齒牙も早くから永久齒が發生したが、精神の發育は、必ずしも身體の發育とは伴はなかつた。

性的早熟の女兒の多くは、早くから異性に接して、妊娠したり分娩したりするのであつて、モントゴメリーは一歳で月経の始まつた女が十歳で分娩した例を観察し、ルハレルは二歳で月経のあらはれ

たものが九歳で分娩した例を記載して居る。ルフエーヴルがベルギーの學士院に報告したところによると、リユクセンブル生れの一少女は生れながらにして恥毛を持つて居たが四歳の時に月経が始まり、八歳の時、三十七歳になる従兄のために妊娠させられたといふことがある。男はその罪によつて五年の禁錮に處せられたそうである。その男の年齢が、日本流に言へば三十八歳で、長右衛門の年齢と一致して居るのも面白く、氣の早い學者ならば「満三十七歳の男子は、早熟の少女と情を通じ易し」と結論するかも知れない。

支那の輟刊録には、「松江民蘇達郷女年十二、贅浦仲之子、爲婿、明年生一子」とあり、わが國の松屋筆記にも、和州諸將軍傳に「永祿七年甲子春三月、丹波國にして七歳の少女、子を産む。これ世を擧げて天下の恠異なりと言ふ」とあつて、その他の史乘や雜書にも性的早熟の例の記載されてあるのは決して少なくない。

さてかやうな性的早熟がどうして起るかといふに、男子と女子に於ては、其起因が異なつて居るらしく、男子の早熟は、大脳と小脳との間に介在して居る松葉腺なるものに腫瘍が出来て、其内分泌液が血中に送られなくなると起るといはれて居る。即ちこの松葉腺は、生殖器關の發育を抑制する機能を營むのであるから、その機能に障害が起れば、生殖器關の異常な發育を來す譯である。人間の體內には人間の子供らしさを保つ臓器が二つあつて、その一つがこの松葉腺、今一つが胸廓内にある胸

腺である。さうして松葉腺は生殖器關の子供らしさを保ち、胸腺はその他の點の子供らしさを保つのであつて、胸腺は大人になれば消失し、松葉腺も思春期に入つて萎縮する。松葉腺の機能は近年まで不明であつたが、はじめてドイツの學者フオン・ホツホルトが、性的早熟の一男兒に就て觀察し、松葉腺の腫瘍が、その原因となつて居ることを發見してから、多くの學者によつてその説がたしかめられたのである。その男兒は年齢傳かに五歳であつたが、身體は十三歳ぐらゐの大きさで、性的にも精神的にも大人と變らなかつた。兩親の語るところによると、生れた當座は普通の兒童と變らなかつたが、頭の病氣にかゝるなり、急に發育して聲がはりさへしてしまつたといふ事である。彼はホツホルトの診察を受けてから約一ヶ月後に死んだが、解剖して見ると、松葉腺の腫瘍であるとわかつた。いつれにしても、松葉腺は人間をして、早熟ならしめないやうに努力する器官であつて、その昔哲學者デカルトが、(一六二八年)松葉腺をもつて精神の存在する場所と認めたことを思ひ合せると、頗る興味がある。

かくの如く男兒の性的早熟と松葉腺との間に深い關係のあることは確かであるけれども、女子の性的早熟と松葉腺との關係についてはまだ明かにされて居らない。のみならずクルシユマンの如きは、女子の性的早熟と松葉腺の間には、何の關係もないやうに説いて居るのであつて女子の早熟は主として卵巢の腫瘍に基くものであることが明かにされたのである。前に私が松葉腺の腫瘍といつたのは腫

瘍により、松葉腺の實質細胞の破壊されることを意味せしめたのであるが、こゝで言ふ卵巢の實質たる、特殊の上皮細胞の異常なる増殖を意味するのである。即ち卵巢の實質細胞の増加によつて、その内分泌液たる性ホルモンが多量に血中に送られ、ために生殖器關の早期發育を促がすのである。ホフマイエルは五歳の早熟女兒を手術して、その卵巢腫瘍を取り除いたところ、それまであつた月經は停止し、恥毛が再び發育しないことを經驗して、この説を確めることが出来たのである。

同じく性的早熟であつても、男性と女性とに於て、その原因がかくの如く異なつて居るといふことは、一般に男女兩性に通有な他の現象を、同一の態度で論ずることの危険を暗示して居るといつてよい。女性の側から言つても男性の側からいつても、兎角、男子なり女子なりに特有な生理及び心理を顧慮しないで、兩性相互の問題を解決するのは困難であらうと思ふ。ことに女子は、その環境の影響を受くことが男子よりも著しいから、女性問題は之を取扱ふに際して、頗る複雑であることを用意してかゝらねばならぬのである。

以上は、身體の病的變化に基く性的早熟に就て述べたのであるが、私が特に注意して置いてほしいと思ふのは、女子の心理的の性的早熟である。即ち、生殖器關は小兒の状態にありながら、性的のみが早期に發動する早熟のことである。かやうな早熟は、多くは遺傳的に變質した個人に見られるところであるが、やはり環境の影響が重大なる關係を持つて居る。このことは女兒教育上看過すべか

らざる所であつて、放縦淫蕩な家庭に育つた女兒は、男兒よりも寧ろ、多くの危険に面して居るといつてよい。ウルフェンは、両親と同室に寝る習慣であつた十二歳の少女が、両親の性的生活を目撃して性的興奮のため恐ろしきオナニーの習慣に染み、別人のやうな容貌になつた例を記載して居るが、日本のやうな生活の様式を持つた家庭では、夫婦たるものは、この點に深甚の注意を拂はねばならぬと思ふ。マニアンの記載によると、五歳の時からオナニーを覺えた變質性の少女が、十二歳の頃には盛んに男子を誘惑して性的満足を得て居たといふことである。かゝるものが所謂ニンプオマニーといふ一種の精神病に陥り易いのである。

花柳社會に生ひ立つた少女が、見る見真似に性的早熟を來すことも、また自然の道理である。タルノフスカヤ女史が、ロシアの賣笑婦百五十人に就て、その始めて異性に接した年齢を調査した結果によると、九歳が一人、十歳が一人、十二歳が四人、十三歳が十二人、十四歳が十四人、十五歳が三十人、十六歳が三十六人であつた。即ち百五十人のうち六十五人は十六歳以下で異性に接したことがわかつた。又、パリーの有名な學者バラン・ヂュシヤトレーがパリーの賣笑婦三千五百七人に就て調べたところによると、十七歳以下で異性に接したものが五・六プロセントに上つた。マーチノーは六百七人の賣笑婦のうち、五歳から二十歳以前に破爪したものが四百八十九人であることを認め、ゲリンマルヂとグエリエリは、多くの賣笑婦は十歳以前に破爪するものだと説いて居る。いづれにして

も環境が性的早熟を促がすことは争ふべからざる所である。不良少年少女問題を取り扱ふ人は、女子の性的早熟を十分理解して置かねばならぬと思ふ。

不満と抑制

こゝでいふ「不満と抑制」は主として「性的不満と性的抑制」をいふのであつて、その性的不満と性的抑制とが、女性の心理に如何に影響するかを述べようと思ふのである。性的不満と抑制は、無論男子にもその影響を及ぼすことが少なくないけれど、色々な原因によつて、女性の受ける影響の方が遙かに大きいから、女性の異常心理を考察するには見逃してはならぬ要素である。ことに女性は性的不満と抑制とを餘儀なくされる事情に逢ひ易く、かの夫婦生活に於てすら、男子の無頓着により、女子のみが不満に陥ることも少なくないから、良人たる男子にとつては、決してないがしろに出來ぬ問題である。

性欲に限らず、食欲の不満もまた、同じやうな心理的影響を與へるものであるが、食欲の不満による影響はいはゞ急性であるに反し、性欲の不満による影響はいはゞ慢性であつて、その影響が徐々に働き、従つて通常、性的不満から來た異常心理であるに拘はらず、その原因が氣づかれにくいので

ある。

性的不満から起る異常心理のうち最も普通なるは、不安と恐怖とである。而も多くの場合、それは理由の無い不安と恐怖である。かやうな不安と恐怖に襲はれたものは、何事を行つて見なければ、じつとして居られないのである。それが若しも年若い女性であるならば、赤い色と律動的な運動に對するあこがれから、敢て放火を試みるやうになり、又はデパート・メントストアなどへ行つて萬引をしやうとするのである。西洋でも日本でも、昔から尼僧院で色々珍しい事件が起つたのは、多くは性的抑制と不満がもとである。チンメルマンの記載によると今から凡そ三百年ほど前に、ある日フランスのある尼僧院の一人の尼が、何を思つたか、「ニヤゴ」と一聲、猫の啼く真似をした。するとその傍に居た二三人の尼僧は、直ちにそれに和して、「ニヤゴ」と合唱した。暫らくすると、尼僧院の隅々に傳はつて、「ニヤゴ」「ニヤゴ」と啼き出し、その翌日から、毎日時間をきめて數時間づつ、すべての尼僧が猫の啼聲の合唱をすることになつた。

驚いたのは附近の住民である。やかましいばかりでなく、何となく氣味が悪かつたのでその不思議な合唱をやめて貰ふやうに警察に訴へ出ると、警察でも捨て、置けず、僧院に人を使はして忠告したが、尼僧たちはいつかな之をきゝ入れず、却つて以前よりもはげしく啼き出したので、遂には軍隊の出動を乞うて、僧院の門を警護し、若し猫の啼聲をまねるものがあつたならば、容赦なく鞭刑に處す

ることにして、漸く鎮壓することを得たのである。

カルダンは第十五世紀にドイツのある尼僧院で起つた出来事が、歐洲各地の尼僧院に傳播したことを記載して居る。ある日、一人の尼僧が、突然その朋輩に噛みついた。するとその朋輩はまた他の尼僧に噛みつき、間もなくすべての尼がお互に噛み合つた。ところがこの話が他の尼僧院に傳はると、其處でも忽ち噛み合ひが始まり、遂にはドイツの殆んど凡ての尼寺に傳はり、はては國境を越えてオランダからローマの尼僧院に擴がつたといふことである。

少し前に京都でSといふ尼僧が寺院に放火して世間の問題となつた。色々複雑な動機が擧げられて居たやうであるが、恐らく性的不満もその重大な一原因であつたにちがひない。尼僧が如何に性的煩悶を持つて居るかは、「古今著聞集」に擧げられた例でもわかる。

「南都に、又一生不犯の尼ありけり。遂にあしざまなる名立ちたる事もなくてやみにけり。臨終いかがあらん。世にあり難きために人々いひける程に、病をうけて大事になりければ、善智識の爲に、小僧を一人請じて、念佛をすゝめければ、念佛をば申さで、××のくるぞや」といひて、遂にをはりにけり。一期が間、ゆゑしく思ひとりては侍れども、心の内には此事をかけたければこそ、かくをはりの詞にもいひけめ。何事も只心の引くかたに、善惡の報を定むるなり。よくよく用意あるべきことにこそ」

その昔、鎌倉松ヶ岡には東慶寺といふ尼寺があつた。亭主を嫌つて離縁を欲する女が其處へ駆けこめば、足かけ三年の尼僧生活によつて、立派に縁が切れるので「縁切寺」の名があつた。満二年間の性的抑制でも、強ひられた生活であるだけ、定めし色々な異常心理に基く現象が見られたであらうと思ふが、遺憾ながらその具體的事實を私は知らない。然し、

松ヶ岡相身互の癪を押し

松ヶ岡寝そびれた夜のぐち競べ

松ヶ岡俱に語るも會者定離

世にありし話にこそぞ松ヶ岡

松ヶ岡似たことばかり話し合ひ

等の川柳から察しても、その裏面の性的煩悶が窺はれぬでもない。一つことや、似たことばかりを繰返して話すのも、實は、性的不満から起る不安の然らしめる所である。甚だしくなると匿名の手紙によつて多くの人を困らせたり、或は一定の人間を陥れるために、あらゆる複雑な犯罪手段を講ずるモノメニア的行動となるが、それ等も要するに性的不満の結果である。

性的不満と抑制から起る異常心理で、不安と恐怖に續いて多いのは所謂「残忍性」である。食欲が満されないときに氣の荒くなることは、わが國の議會に於ける議員の喧嘩が、空腹時に最も多いこと

を見てわかるが、性的不満も同様に、人の「氣を荒くする」原因となるのである。昔から偉人や天才といはれた人の妻に、残忍性の強い「じやく馬」の多かつたのは、偉人天才に性的缺陷を持つものが多く、従つて細君を性的に満足せしめることが出来なかつたためではないかと思はれる。ドイツの名畫家アルブレヒト・デュラーの細君は、良人が仕事をして居るとわざ／＼それを邪魔しに行き、はてはデュラーが逃げ出すと、追かけて、引き戻し、毆つたり蹴つたりした。又同じく畫家ベルゲムの細君は、良人に少しの休む暇を與へず、良人が二階で少しでも休んで居る様子だと、いつも下から棒をもつて天井をつきあけ、もしベルゲムがそれに對して足で床をたゝいて合圖をしないと、その場合、彼女はベルゲムに恐ろしい責め苦を與へた。

獨身の女教師が生徒に對して残酷であることは、屢ば觀察されるところである。さういふ女教師は一般に依怙最良をするばかりでなく、小學校ならば、男の生徒のあるものを無闇に愛しやうとする傾向がある。又、女學校ならば、生徒一般に對して一種の嫉妬心を持つのである。女學校の獨身の女教師の手で、その女教師の教へた生徒の縁談が纏められることは、恐らく甚だ稀であるにちがひない。又、御殿女中の残忍性、たとへばかの「加賀見山舊綿繪」に於ける岩藤のやうな残忍性も、やはり性的不満に依ることが多いのである。

「オ、何ぢや、泣かしやるか、オ、ちつとこたへやう、悔しかる。町人の娘ぢやとて、今では武家の

御奉公人、本にさうぢやわいの。最前もいはしやるには心付かぬ事有らば、御指南頼むといはしやつたの、ウ、ドレ教へてやる」

とは、岩藤が尾上を責める言葉である。

「相手にならぬは此岩藤が恐しいか、但しは又おくれたのか。遣は町人の娘なれば、又物三味は恐しい筈、怖い筈、オ、道理ぢや〜、そんならコリヤ納めましょ〜。ドレ〜、歸りましょ〜。ホンニ〜、此方にかつて、コレ〜、これ見さつしやれ、足袋も草履も砂まぶれぢやわいの。イヤコレ尾上殿、ヤ何と此草履のよごれたのを、拭いて下されぬか」

この「言葉を重ねる」ところ、さすがに作者は用意周到である。即ちかゝる女性の觀察に行き届いて居たことがわかるのである。

繼母の繼子いぢめ、姑の嫁いぢめにも、明かに性的不滿を認めることが出来る。所謂月経閉止期（日本女子では四十五六歳）以後に於ては、性的不滿から起る殘忍性が一層強められるのが普通であつて、ことに後家になつた繼母、後家になつた姑に著しいのである。かやうな女性は、いぢめることそれ自身に興味を持つがために、道德や宗教によつて其の殘忍性を矯めやうと謀つても、何の效能もないのである。「心中宵庚申」で、半兵衛が姑の心を察して、女房お千世を去らうといひ出すと、「ム、思ひ合ふた夫婦合。誠らしうは思はねど嘘に涙は出でぬ物。眞實去るがぢやうじやの」

「ハテお前をだます程なれば、此御訴訟は申しませぬ」

「ヲ、嬉しい〜。おれも鬼には成とむない。必ず去りや。間に合ふて欺しやれば、コレ此母が咽笛を、出刃庖丁でちよいじやぞや。母殺すか、女房去るか、夫からは其方の勝手次第。ア、さらりと穢土の苦が脱けた。此世からの生佛とはおれが事。足輕う非時に参りましょ。こちや未來迄、のきざりせぬ閨の同行が、さこそ待や焦れて、南無阿彌陀佛〜。さんよ其形でつい供せい。ア南無阿彌陀。松よ、又見世のつるし喰ふな。アなまみだ」

宗教に對する一種の皮肉と見られぬでもない。川柳子の所謂、去り状のそばでこ〜珠數を繰る現象は、サヂズムに對して、普通の宗教が何の權威をも持たぬことを示して居る。

百八の内五六十嫁のこと

とあるけれども、この異常心理が極端になつた場合には、百八の煩悶悉くが「嫁のこと」から起るにちがひない。

姑死に娶片腕を繼いだやう

結局、姑の嫁いぢめは死によつてのみ阻止さるべきものであらう。

生むを欲せぬ心

Ah! l'amour! l'amour

C'est le Plaisir d'un jour

Pour le regret d' neuf mois.

(戀とは、戀とは！)

一日の樂しみ、

九ヶ月の悲しみ。)

さすがはこの俗諺の本場であるだけ、フランスでは今でも、卵巢剔出手術を、素敵に高い料金をとつて、生むを欲せぬ女に施す専門家があるといふことである。ましてや或種の手術を行ふものに於てをや。

「伊勢の長者の木の下で、七つ小女郎が八つ子を生んで、生むにや生まれず、おろすにやおりず、向ふ通るはお医者じやないが、醫者は醫者でも藥箱持たぬ、藥御用なら袂に御座る、これを一服煎じて食めば、蟲もおりるし其の子もおりる……」

日本もこのやうに、徳川時代にはなかく負けては居なかつた。「月水早流し」「朔日丸」これ等の藥が享保年間には、すばらしい勢で、所謂「中條流」の女醫先生たちの手によつて賣られたといふことであるが、彼等は藥を賣るばかりではなく、機械的の手術をも行つた。明治以後の世になつてからはこれ程堂々たる状態は見られないやうになつて、太平洋を隔てた彼の國にくらべると、いさゝか誇つてもよいかも知れぬ。セントルイスの醫師ドーセットは嘗て次の様な演説をした。

The average student is not impressed by precept or example with the enormity of the crime, and coming into practice, often a poor young man, is first shocked when he is asked to procure an abortion; but after the wolf has howled at the door for a time he yields to the temptation and often drops into the practice……

(大意。大ていの學生はこの犯罪(人工流産)の極悪非道なことを心に深くしみこませては居ない。さうして、開業して人工流産を要求されると、はじめはびつくりするが、一たび狼が吼へたあとは平氣になつて、ついで深みへはいつてしまふ……)

して見ると、彼の國の醫者どもは、随分盛んに斯る手術を行ふものと見える。バーネスビーはその著「醫術の混沌と犯罪」の中に次のやうな例を書いて居る。ニューヨークのある若い夫人が妊娠したところ、どうしても子を生みたくないで、その家附の醫師をたづねて人工流産の手術を行つてくれ

と頼んだ。ところが醫師は頑固な人間であつたので、きつぱりと斷り、色々理窟を説いて思ひ止まらせようとしたが、夫人の心はびくともしなかつた。然し醫師は依然として頭を横に振つたので、夫人はそれではあなたの知つておいでになるお医者さんを紹介してくれといったが醫師はそれにも返答をせず、夫人は濼い顔をして歸つて行つた。あくる日、醫師は夫人の親友なる某夫人をたづねて、あなたから、思ひとまるやうに話してくれと頼んだ。するとその人は、「さあ、私が忠告したとて、やつぱり駄目でせう」といつた。そこで醫師は、「實は、あなたをたづねたのは、どうしてもあの人が忠告を受け容れぬ場合に、うっかり危険な醫師にかゝるとわるいので、此處に信頼すべき醫師の名を三人書いて置きましたから、私が教へたとは言はずによく傳へて下さい」といつて、三人の名を書いた紙片を渡した。その人はどんな醫師が人工流産手術をやるのかと、好奇の心をもつてそれを讀むと驚いたことに三人とも、婦人科醫として極めて有名な醫師だつた。かくて勿論、手術はそのうちの一人によつて行はれ、若い夫人の生むを欲せぬ心は満たされた。

生むを欲せぬ心は、大昔から女性に存在したのであるが、新マルサス主義の勃興と共に猛烈に近代の女性にはびこるに至つた。リープマンは二十四歳の美しい女が、夜間、十分に休み得ないと、夏の旅行に差支へるがために、自から人工流産を行つて出血のために危険に瀕した例を記述して居るが一般にこの例のごとく生みたくなき理由は極めて些細である場合が多い。然し容色の衰へることを心

配したり、種々の享樂に差支があるからとの理由は、その實表面的の理由であつて、たゞ何となく生みたくなきといふのが、生むを欲せぬ心の真相であらう。

若し本當に生みたくなきのであつたならば、妊娠そのものを妨止すべきであるのに、それをしないで、妊娠してから胎兒を破壊しようとするのは、スピネルも特に指摘して居るやうに、いはゞ一種の妊娠恐怖症といふべきもので、これが即ち近代文明の産物なのである。すべて恐怖症なるものには深い理由がない。たゞ無闇に恐れるだけである。さうして恐怖症を持つものは、恐ろしいことに豫め近つかぬようにはしないで、恐ろしいことに逢つてそれを恐れるのが常である。

従つて時としてかの「想像妊娠」なる現象が生ずる。想像妊娠とはいふ迄もなく、妊娠しないで妊娠したと同じ徴候をあらはす現象であつて、甚だしく妊娠を希望する時にも起るが、多くは妊娠を恐れる時に起るのである。歴史上に名高い想像妊娠の例は、かの英國のメリー女王で、彼女は王子を希望するあまり想像妊娠を起し、十ヶ月目には陣痛をさへ感じたが、それが實の妊娠でないことがわかつた時、大に悲觀してはけしいヒステリーにかゝり、かの新教徒虐殺を企て、史上に汚名を残した。ウエーア・ミチエルは子供を希望しながら而も妊娠を恐れる場合に最も多く想像妊娠が起るといつたが、單に妊娠を恐れるだけでもこの現象は起るのである。これはことに月經閉止期の女に起り易いといはれて居るが、然かしました若い女にも稀ではないのである。

想像妊娠は、いふまでもなく自己暗示による月經の停止及子宮の膨脹である。女性は一般に自己暗示に罹り易いのであるから、そこへ妊娠を恐れる心が働き、かやうな異常な現象を生ずるのである。無し、想像妊娠のやうな極端な場合は別として、妊娠を恐れるのあまり、僅かなる身體の異常を妊娠と思ひ誤り自ら墮胎手術を行つて、危険を醸す例は決して少なくはない。今試みにウルフェンの擧げた一二の例を記すならば、二十三歳の女は、月經が八日間遅れたために Haarnadel をもつて手術を行ひ、誤つて醫師にかゝるのやむなき破目に陥つたが、醫師の診察の結果妊娠ではなかつた。ある若い産婆はやはり同じやうな原因で Sublimatloesung を應用し腹膜炎を起して死亡した。ある若い寡婦は Gaensefeder を用ひて死亡し、二十二歳の女は Schmierseisenloesung を用ひて敗血症で死亡した。かやうな恐ろしい危険をも敢てするほど妊娠を恐れるといふのは、むしろ恐怖といつてもよいであらう。

だから、人工流産を起す薬劑はその需要が甚だ多いのである。即ち薬劑さへ飲めばそれで安心が出来るからである。丁度肺病患者が薬劑は無効であると知りながら、恐怖のために服用するのと同じ心理である。

霜月の朔日丸は茶屋でのみ

と川柳にあるのも、この消息を如實に物語るものといつてよい。Juniperus sabina, Taxus baccata, O

leum succini, Cantharides, Aloes, Phosphorus, 丸等はいづれも恐ろしい副作用を持つのであるから、民間に販賣されて居るのは、いはば毒にも薬にもならぬものが多いらしいが、それでも、のんで居さへすれば、心が安まるといふので、盛んに歓迎されるのである。

スコットは、今日人工流産實行の風習は信じ得ない程、甚だしく蔓延して居ると言つて居るが、またたくそれは事實であるらしい。ドレリスは巴里で、一八九八年から一九〇四年の間に人工流産の率が二倍したといつて居る。一八九一年に懲役の宣告を受けたトマス夫人は二フラン宛の報酬で八年間に約一萬の人工流産を行つたといはれて居る。何分一九〇六年には、フランスの醫師ダリカリエルが「人工流産の権利」といふ小説を書いて、女子はつねに人工流産の完全な権利をもつて居ること、及び、女子は出産の苦痛と危険とに堪へるか堪へないかに關しての絶對の審判官であることを論じたくらであるから、ますます、いゝ氣になつて人工流産を行ふものが殖えて來たのである。

エレン・ケイは、特殊な場合、選ばれた青年を残酷に殺すことを何の抗議もせず黙許して居る文明が、子宮内にある最も劣つた物をさへ調節する権利を認めないことを指摘して論じて居るけれども、かうした考へ方は、畢竟、生むを欲せぬ心を刺戟するに役立つのみであらう。

生むを欲せぬ心は人工流産以外に、殺兒の現象となつてあらはれる。殺兒は時として男子の教唆によることがないでもないが、通常純粹な女性犯罪と見做されて居る。さうして殺兒は、多くの場合、

人工流産と同じ心もちで行はれる。即ち胎内にある兒に對する感情と同じ感情をもつて行はれるのである。換言すればその際母たるの感情は少しもまじつて居ないのである。勿論妊娠中にも母たるの感情が起る場合がないことはない、その感情は胎兒の腹にある間續くものであるが、いざ生れるとなると、其母たるの感情は、他の色々な感情、即ち殺兒の動機となる諸多の激烈なる情緒の爲めに押へつけられてしまふのである。さうして一途に殺さうとする心のみ驅られ、残忍性が極端に達する。一九〇八年シエーブルのNといふ旅館の女主人は双生兒を生んでこれを絞殺しようとしたが、うっかり絞殺し損じたため、こんどはその双生兒を生きうめにしてしまった。ドイツのある三十歳の豚飼人の娘は、三人目の私生兒を孕んで産んだが、産んだ子はどう始末したのか見つからなかつたので、逮捕して取調べると、彼女は子を産むなり、その子を豚小屋へもつて行つて豚に食はせたといふのであつた。彼女の白狀した所によれば、生れた子は死んで居たといふのであるけれども、もとより知る由もなかつた。これ等の例は、實に生むを欲せぬ心の病的に發達したものと見做すべきであらう。

女性犯罪の特徴

—

「大抵の殺人事件は情 況 證據によつて裁判されるものですよ。何となれば、他人を連れて来て、目撃させながら殺人を行ふ者は滅多にありませんから」

これは英國のバーシー夫人事件に於て、被告バーシー夫人に死刑の宣告を與へた判事デンナムが、被告の辯護人から、純然たる情 況 證據のみで判斷するのは頗る危険ではありませんかと突きこまれた時、傲然として答へた有名な言葉である。

今から四十年近くも前の話ではあるが、直接證據の非常に重んぜられる現今でも、嚴密にいへば、多くの殺人事件は、犯人の自白しない限り、やはり情 況 證據によつて判斷されるのであつて、人間が裁判する以上、永久にやむを得ないことであるかも知れない。

英京ロンドンに留學中、私はレジエント公園から程遠からぬハミルトン・テレースと稱する閑靜なところに半年ほど下宿して居たことがある。このハミルトン・テレースこそは、前記バーシー夫人事件と頗る關係が深く、即ちバーシー夫人が、自分の殺した死體を運んだ乳母車を捨てたところであつて、私はよく、散歩の時などに、「この邊に捨て、あつたのかな」などと考へて立ちどまつたものである。

×××氏から、何か犯罪事件について書かぬかといはれたとき、私は是非このバーシー事件を紹介して見ようと思つたのである。といふのは、この事件は一八九〇年十月即ち私の生年月に起つたも

のであつて、かさね々私には因縁があり、而も一八九〇年は寅年であるが、その寅年の十月に起つたことを同じく寅年の十月號に發表するの何かの因縁であるかも知れぬと思つたからである。

かやうな因縁よばりは兎に角として、この事件は嫉妬を動機とする殺人の最も著しい例であつてその殺人の前後の事情が女性犯罪の特徴をよく示して居るから、犯罪學上にも頗る興味が多いのである。

英國の女は、今でもさうであるが、正式に結婚したことがなくても、よく「ミセス何々」といふ名前を用ひて居る。而も本名に「ミセス」をつけるのではなく、自分の知人とか親戚の名を借りて「何々夫人」といつて居るのである。どういふ譯でさういふことをするのか、彼地に滞在在中も、別に深いせんさくをして見なかつたからわからないが、このパーシー夫人もその例で、本名はメリー・エリーナー・ホイーラーと呼び、當時二十四歳であつたのである。

二

一八九〇年十月二十四日（金曜日）の午後七時頃、一人の青年がハムステッドのクロツスファイールド路をとほりかゝると、一人の女が地上に横はつて居た。青年は多分、その女が酔ひつづれて寢てるのだらうと思ひ、そのまま行き過ぎたが、五六歩進んだとき、若しや急病にでも罹つたのではないかと考へ、再び戻つて、闇の中を身をかがめてよく見ると女の頭は毛織の衣服につゝまれて居たが、

明かに死んで居たので、びつくりしてたゞちに附近の警察に訴へ出ると、とりあへず一人の警官がその場に駆けつけたが、他殺死體とわかつたので呼子笛をならして附近に居る警官に應援を求めた。程なく醫師がかけつけて調べて見ると、女の頭は胴から断たれて僅かに背部の皮膚でつなかつて居るばかりであつた。相當な服装をして居たけれども、それが何人であるかはわからなかつた。

探偵たちは直ちに活動を始めた。頸が殆んど胴から断ち切られて居るにも拘はらず、地上には少しの血しかこぼれて居なかつたので、死體は他の場所から其處へ運ばれたことがわかつたけれども、何處で殺されたかは推定することが出来なかつた。すると、その同じ晩、ハミルトン・テレース（即ち私の下宿して居た街）に一臺の乳母車が發見され、その中には、べつとりと血がついて居たので多分それは、その死體を運んだものであらうと推定され、犯人は、途中で死體を捨て、から更にその乳母車を遠くに運び、そのまゝ置き捨てにしたものであらうと推定されたのである。

翌日の新聞には、殺された女の服装が委しく記載され、黒いジャケットに黒の帽子と着物、下着にはP・Hなる頭文字がついて居ることなどが書かれてあつた、兎角新聞記事は宛にならぬものだといはれて居るが、身許不明の死體をアイデンチファイするには屢ば役に立つものであつて、この場合にも、この新聞記事を見た被害者の家族によつて、直ちにそれが、プリンス・オヴ・ウエールズ路に住むフランク・ホツグなる人の細君フエーブ・ホツグであるとわかつたのである。

フエーブは昨日の午後三時頃、二つになる女の兒を乳母車にのせて出かけたまゝ、夜になつても歸らなかつた。彼女の良人フランクは、多分彼女が病父の見舞に行つたのであらうと思つて、翌朝早々たづねて行くと、昨日は來なかつたとの事に、びつくりして家に歸ると、妹のクララが彼に新聞記事を見せて、どうもこれは義姉さんらしいではありませんかといふと、彼は暫らく考へて居たが、やがて妹に向つて、

「バーシー夫人のところへ行つてたづねて来てくれ」と言つた。

このバーシー夫人といふのはフランクの情婦であつた。彼とバーシー夫人とは、彼が數年前フエーブと結婚する以前から關係があつて、結婚後も依然としてその關係が續けられて居たのである。フエーブは其時三十を過ぎて居たが、長い顔をした美人であつた。バーシー夫人は、顔はフエーブよりも幾分か劣つて居たけれど、年が若くて體格がよかつた。之に反してフエーブは身體が弱く時々病氣をし、その年の二月にも、フエーブは流産をして長い間床について居たが、その時バーシー夫人は介抱に來て、自分の金をつかつてまで色々なものを買つて病人に與へ、親切を盡してやつた。だからこの三角關係はいはゞ平和のうちに續けられて居たのである。

バーシー夫人はブライオリイ街の二番地の一階に住んで居たが、問題の金曜日の夜、フランクは夫人をたづねたところ、留守であつたので、「十時二十分まで待つたけれど、もう歸る」といふ文句を書き残して歸つて來た。いつも彼は、裏口から彼女の寢室へはひるこゝになつて居て、若し寢室に灯がついて居なければ、歸りが遅くなるといふ合圖になつて居たので、彼は別に氣にもとめずに歸つたのである。ところが、翌朝になつて、フエーブが歸らず、而もどうやら誰かに殺されたらしいことを知るなり、彼はゆうべバーシー夫人の留守であつたことを思ひ合はせて、妹にむかつて、バーシー夫人のところへ行つてくれと頼んだのである。

妹のクララは、兄が自分でたづねて來ればよいのと思つたけれど、バーシー夫人とは仲がよかつたので、何氣なく出かけて行つた。先方へ着くなり、「昨日義姉さんがたづねたでせう。」と、きくと、夫人は一度は「いゝえ」と言つたが、更に念を押すと、

「實はねえ、言ふまいと思つたけれど、フエーブさんは五時頃に來て、一寸子供の世話をしてくれといつたのよ。私がいやだといふと、それではお金を少し取り替へてほしいといつたが、一シルリングあまりしかなかつたから、それでもよければといつたのよ。誰にも言つてくれるなといつたから、かくして居たの」と答へたのである。

クララは、義姉が決して他人から金を借りるやうな女ではないと知つて居たので、この言葉をきいて變に思つたが、すぐ様話をかへて、「新聞で見ると、どうやら義姉さんは殺されたらしいから、これ

から二人で、死體假置場へ行つて來ませう」と誘つた。夫人は非常に當惑するかと思ひの外、平氣で一しよに警察へ行き、それから一人の警官に案内されて死體假置場にはひつた。

問題の死體の顔は血に染まつて、さつぱりわからなかつたが、着物はフエーブのものに違ひなかつたのでクララが一目見て「義姉さんだ」といふと、パーシー夫人は可なりに狼狽して「違ふ、違ふ、さあ行きませう」とクララの手をぐいぐい引張つた。然しクララはなほも死體へ近づいて衣服をよくあらためた。そのうちに醫師が來て、顔の血を洗ひ落すと、間違ひもなくそれがフエーブなので、クララがそのことを警官に語ると、夫人はクララを引張つて、出ようくとあせつた。この姿を見た警官は夫人の舉動を怪しんで、二人を車にのせて警察署へ連れて行き、其處にあつた例の乳母車を見せると、クララは直ちにそれを義姉のものとして認めた。

丁度その時警察にはフエーブの良人フランクも來て居た。警官はこの三人が死者に深い關係のあることを知るなり、フランクの身體検査を行ふと、パーシー夫人の家の鍵をもつて居たので二人の警官は夫人だけを連れ立つて、夫人の家を搜索することになつたのである。

警官が臺所に入るなり、あまりにおそろしい光景に、暫らくはそこに呆然とたゞすんだ位であつた。四方の壁をはじめ、天井に至るまで血の飛沫に蔽はれ、火かき棒には血の他に髪の毛までがこびりついて居た。料理臺の抽斗の中にあつた大庖丁にも、傍にかけてあつたエプロンにも血がにじんで居た。

その他カーテンにも浴槽の下の敷物にも血痕が認められ、二枚の板ガラスが割れて、やはり血がついて居た。

警官が搜索をして居る間、パーシー夫人は容間の椅子に腰かけて、はじめ口笛を吹いて居たが、程なくピアノを弾じにかゝつた。やがて警官たちが彼女のそばへ來て、どうしてあんなに血がついたのだと聞くど、

「鼠を殺したんですよ。鼠を殺したんですよ」と答へるだけであつた。

警官はそれから同じ建物に住む他家の人々を訊問した。さうして前日、乳母車をもつて夫人をたづねた女のあることを知つたので、夫人をフエーブ・ホツグ及びその兒殺害の容疑者として逮捕し、警察へ護送したのである。警察で身體検査の行はれた結果、彼女の衣服にも血痕が発見され、又、彼女に手袋を脱がしめると、その手に引つ掻き傷のあることがわかつた。然し、彼女は「決して殺した覚えはない」と言ひ張つた。

翌日即ち日曜日の朝、フィンチレー路の空地をとほつた一人の物賣りが、女の兒の死體を発見して届け出たので、警察がフランクを呼んで見せると、わが子にちがひないと言つた。醫師が検査すると、別に暴力の加へられた痕はなかつたが、窒息か又は寒氣のために死んだものと推定されたのである。

取調べが進むに従つてパーシー夫人に對する疑ひは益々深められて行つた。問題の日の前日即ち木曜日の朝、彼女はフエーブのところへ、「今日の午後は非嬢ちゃんを連れて来て下さい」といふ書附を送つた。然しフエーブは用事があつて行くことが出来なかつた。すると金曜日になつて夫人は更に近所の子供を頼んでフエーブのところへ手紙を持たせてやつたのである。

するとフエーブはその日の午後女の兒を乳母車に乗せて彼女の家をたづねたのであるが、それから以後どんなことが起つたかは誰も知る人はない。夫人の隣りに住んで居るPといふ夫人の證言によると、金曜日の午後、パーシー夫人の家で、ガラスの割れる音と子供の泣く音が聞えたので、何事が起きたのかと耳をすますと、それつきり静まつたので、別に氣にも留めなかつたといふのであつた。

その外の隣人たちも、同じ時刻にパーシー夫人の家で異様な物音のするのを聞いた。ある者は裏口へかけ出して見たが、パーシー夫人の家には、時時男がたづねて來るので、邪魔をするのもよくないと思つて、そのまゝにして置くと、夜になつて、床を洗つたり、歩きまはつたりする人々の足音がしきりに聞えたといふのであつた。

それから彼女の家から程遠からぬところに住むEといふ女は、金曜日の晩彼女が乳母車に重いものを載せて押して行くところを見た。なほ又プリンス・オヴ・ウエールズ路に住むGといふ女も彼女が乳母車を押して行く姿を認めた。その他にもまだ彼女の同様な姿を見たものがあつたのである。

以上の事情からして、彼女はその日フエーブの後ろから火かき棒で頭をなぐつて氣絶せしめ、後、庖丁で頸を切り、死體を乳母車に載せて途中で捨て、更に幼兒を（その時果して生きて居たか又は死んで居たかわからぬが）別のところに捨て、なほ乳母車だけを運んで捨て、さうして家に歸つたものであらうと推定されたのである。

そこで次に起る問題は、彼女が如何なる動機で、かくの如き怖ろしい犯罪を行つたかといふことである。彼女は最後まで白狀しなかつたからわからぬけれども、やはりフエーブに對する嫉妬とより他に考へ様がないのである。只、數年間も、三角關係が續けられて、而も別にフランクの心が變つたのもなれば、又最近に彼女がフエーブをうらむべき事情もなかつたに拘はらず、全く突然、かやうな残忍な行爲に出るといふことは、一寸、考へ得ざる處である。

けれども、よく考へて見れば、さういふところに、女性犯罪の特徴があるやうに思はれるのである。即ち彼女の犯罪は、一見、突發性のやうに見えるけれども、その實、よほど前からフエーブを亡きものにしようとする心はあつたのであつて、フエーブの病氣の際看護したことも、實は犯罪を行ふ一過程に他ならぬといつて差支ない。かの女性毒殺者が、良人に毒を與へて置きながら、良人の苦しむのに同情して、親切に介抱するといふやうな矛盾した現象と同じものである。かういふ點から見ると、女性の犯罪はいはゞ嵐にたとふべきであつて、嵐の前に氣味の悪い静けさのあると同じやうに、

女性の犯罪の前にも氣味の悪い沈黙と親切とが認められるのである。

さうして一たび嵐が起れば、それは徹頭徹尾破壊的である。後始末も何も考へない「やりつ放し」である。極度の残忍性が發揮され、極度の自暴自棄的態度が發揮される。街の上に死體を捨てるといふことなどは、常識で考へても行はれさうにないのであつて、少しでも犯罪の發覺を怖れるものであらば、そんな無鐵砲なこととはしない筈である。もとより、彼女といへども、色々計畫をしたのにちがひない。さうして彼女としては、罪の發覺をのがれるべき最上の努力をしたのにちがひない。それにも拘はらず彼女は、甚だまづいやり方をしてしまった。これが又女性犯罪の一つの特徴ともいふべきであつて、即ち、女性の犯罪は一見深く計畫されたやうでも、その實破綻だらけなのである。ただこの事件に於て、多少の不審を抱かせるところは、彼女の筋力の問題である。女子は通常筋力に不足があるために、殺人の方法として毒殺を選ぶのであるが、この場合にも彼女が果して、あの怖ろしい慘劇を行ふだけの力をもつて居たかどうかといふ問題が起る。だから、當時の人々も金曜日の午後、パーシー夫人の家で幾人かの足音を聞いたといふ既記の隣人の證言から、共犯者があつたのではないかと想像されたが、然し、共犯者なるものは遂に發見されなかつたのである。尤も、前にも書いたごとく、彼女は體格がよく、フエーブは虚弱な身體をして居たから、彼女一人の仕事としても説明のつかぬことはないのである。

然し彼女がそれ程の怖ろしい犯罪を行ふものであるとは、フランクをはじめ、彼女を知つて居るすべての人々の意外とするところであつてそれ程彼女は平素温順に見えたのである。で、彼女の辯護人は此點を擧げて、頻りに辯護したけれども、彼女は遂に死刑を宣告されたのである。さうして、愈よ絞首臺に上るとき、彼女は教誨師に向つて、

「宣告は正しいですが、證據はちがつて居ます」

といふ謎の言葉を殘して死んだのである。

いづれにしてもこの事件は、戀の三角關係が極端なる悲劇的終末を來した著しい例であると同時に、女性の犯罪心理の一斑を知るに頗る適當な例である。

詐欺の心理と婦人

詐欺と婦人の犯罪心理との關係を述べる前に、詐欺の一般心理に就て考察して見ようと思ふ。私は前に竊盜心理に就て述べたが、詐欺と竊盜とはいふまでもなくよく似た犯罪で、その心理もまた頗る似通つて居るのである。たゞ竊盜は他人の意志にさからつて物をとることであるのに、詐欺は

他人をうまくだまして物をとることである。だから、詐欺は竊盗と比べると竊盗よりもみがかれた犯罪であるといふことが出来る。そして、文明の進歩、科擧や工業の發達と共に、竊盗の方は段々減つて、詐欺が殖えて行かうとする傾向がある。

詐欺の心理の根本となつて居るのはいふ迄もなく他をいつはる心理である。他をいつはる心理は人類の存在と共に古くから存在したものであつて、單に人類ばかりでなく、普く生物界にも見られる所である。然し、他人をあざむかうとするには、直接他人に面接して口をきかなければならない。或は少くとも書いたものを通じて他人に接しなければならぬ。従つて眼附きや顔附きや聲色に、あざむきつゝあるといふことを少しもあらはしてはならない。この點が覆面で出来る竊盗とちがつてむつかしい所であり、又竊盗の際とは智慧の働かせ工合のちがふ所である。

詐欺を働くにはそれ故、相當の智慧がいる。換言すればよほど賢くなくてはならない。然し、幸ひな事に、人間といふものは割合に愚鈍に出來て居るので、その割に苦心を要しない。實際、詐欺師の目から見れば、世の有象無象はよほどあまく出來上つて居るのである。その證據には、同じ詐欺が同じ町で、繰返しく行はれて居る。新聞の記事を読んで居りながら、殆んどそれと同じ詐欺にまんまとひつかゝるのが世の人の常である。だから詐欺師たるものは、他人の行つた方法をそのまま、應用すれば、必ずその目的は達せられる。試みに杜騙新書や晝夜用心記に書かれてある詐欺の方法を一つ選

び出して行ふならば、恐らく今でも成功は疑ひないであらう。如何にも世の中の進歩と共に、新奇な詐欺手段が先から先へと案出される。けれど、それをよく調べて見ると獨創的と稱すべきものは一つもなく昔からあつた方法に多少の改良(?)を施したものに過ぎない。アメリカでは個人を相手に詐欺を働く Minor Confidence Men と、多數の人を相手に詐欺を働く Major Confidence Men とが横行濶歩して居るが、彼等のやり方を調べて見ると、どれも皆、陳腐な方法に臨機の修正を加へたものに過ぎないのである。

詐欺を働く條件として、智慧を働かせること以外に、否、それより以上に大切なことは、巧みに變装すること、俗にいふ猫をかぶることである。實際變装の工合によつて、自分の身分をあざむくことが出来るばかりでなく、學識や智慧をも、先方を買ひかぶらせることが出来る。(尤も變装は主として男性詐欺師によつて行はれる所であつて女性詐欺師によつては、後に述べる理由によつて、あまり行はれない。)だから、詐欺を働くことを「芝居打つ」ともいはれて居る。詐欺師はつまり俳優であるからである。詐欺のことを書いた小説を読んでも、主人公は多くの場合巧みに扮装して居るのである。京の三條の橋詰にある日乞食婆が居眠りして居た。すると、十文字の槍、銃箱、家來六七人をつれた武家を通りかゝつたが、老婆を見るなり馬から下り、傍によつてびたりとひざまづいた。「もう三十年もお目にはかゝりませぬが、私はよくお顔を存じて居ります。私こそは八三郎で御座い

ます。……御不審は尤もですが、あなたは私を御懐胎中、屋敷を御出になつて家來の家で私をお産みになりました。その後私は繼母の手で育ちましたが、ある時乳母が申しますのに、あなたの誠のお母さんは他にあつて、今は御奉公中ですから、そのうちによそながら見せてあげませうと申しまして神田明神の祭のときに見せてくれました。その時から私はお顔を決して忘れません。ところがはからずも今日お姿を拜見して、實に嬉しう存じます……」

と言ひ乍ら彼はほろ／＼と涙をこぼした。老婆が呆氣にとられてほんやりして居ると、その武家は早速辻駕籠をよんで老婆をのせ、河原町邊のかり座敷へ同道して行水させ、晒の帷子に、淺黄ちりめん細帯などをさせて、腰元を一人雇ひ、下へも置かぬ丁寧な待遇をした。

老婆は屋敷奉公をした覚えがなく、多分武家が人ちがひをしたゞらうとは思つたが、かうして丁寧に待遇してもらへばまんざら氣持も悪くないので、そのまゝお袋様になりきつて、四五日榮華な生活を送つた。

ある日人々はこの老婆を駕籠にのせ、主従六七人で、ある呉服店に立寄つた。澤山の高價な品を買ひ求めてから、主人は、

「堀川の屋敷に今一人相役があるから、その人と相談してくるによつて、この品を一時持たせて參るその代り拙者の母を残して置くから、染絹の模様などあとでよく相談しておいて貰ひたい」

と、いつて金銀のはひつた革袋を老婆に渡し、従者をつれて出て行つた。

その日が暮れても客は歸らなかつた。人々は不審に思つて何處のお屋敷ですかと老婆にたづねても、老婆はもとより知らう筈がなく、革の財布には鏰一文もはひつて居ないので、驚いて四條の宿をたづねると、もはや今朝お立ちになつたといふ事……

これは「晝夜用心記」の最初の物語りであるが、實際に於ても詐欺はかうした芝居がかりで行はれるのである。かの「天一坊」の江戸乗込みにしたところが、大部分は作り話であるとしても、如何にもドラマチックである。

詐欺師の中には、その化の皮を容易に見透されるものもあるが、中には本當に化け切つて居るものもある。かやうな詐欺師をドイツ語では特に Hochstapler と呼んで居る。犯罪學者アシヤツフエンブルグは、かやうな詐欺師は詐欺を行ひつゝあるとき、自分でも、虚偽を話して居るか眞實を話して居るかわからぬ位まで、化け切つてしまつて居るのであるといつて居る。つまりさういふ詐欺師は空想力と自己暗示性が甚だ強く、智慧はあまり働かせないで空想力を上が上に働かせ、心から笑つたり又心から悲しんで眞の涙をこぼしたりするのである。極端なものになるとむしろ病的と見るべきもので、巧妙なる詐欺師の精神状態を調べて見ると、變質に陥つて居るものが少くないといふことである。

空想力や自己暗示性はどの人間にも具はつて居るのであつて、詐欺師や詩人にはそれが著しく發

達して居るのに過ぎないのである。ヘッベルが言つたやうに、どんな人でもその日誌には必ず多少のうそを書く。旅行をして来て、見たこと以上の話をしない人は恐らく一人もないであらう。時には一歩進んで「見て来たやうな嘘」もつく。詩人や文豪になると「見て来たやうな嘘」をつき易い。むかし能因法師は、

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞふく白河のせき

といふ歌を作り、自分ながらよく出来たと思へたので、都に居ながら披露するのも口惜しいとて、密かに片田舎にこもつて面を日に照らし色を黒くして、旅行したやうに見せかけて披露したといふことである。だから川柳子は、

御紀行拜見に能因は當惑し

と揶揄した。能因の行動も一種の詐欺と見られぬこともなく、詩人はとかく人をあざむき易いものである。

自分で物を捏造し易い性質のものは、又自己詐欺に陥り易く、他人の詐瞞にかゝり易い。だから詐欺師が詐欺にかゝるためしは古から決して少くない。今から丁度三十年程前にボストンでジャーネガンといふ牧師が、海水中から黄金を探る方法を発見したと吹聴して、水銀の匣を海水中にうづめて置いて一定の装置で電氣を送ると、水銀が黄金に變るといふ實驗をして見せ、その實、潜水にたくみ

なフィッシャーといふ男を雇つて、水銀を黄金に取りかへさせて人々を欺いて大會社を建てたが、あるときフィッシャーの手ちがひから、化の皮がはがれたので、ジャーネガンは、あり金をしこたまつかんで風を喰つて英國へ逃げてしまつた。ところが丁度そのとき英國でも海水から黄金を取る會社が建設されて居たので、彼がその法をきいて見ると、自分のやつたよりも遙かに合理的であつたら、うっかり、持つて居た金を全部投資してしまつたのである。いふ迄もなくその會社もやはり喰はせものであつた。

「晝夜用心記」の中にもこんな話がある。

今橋筋に戸松屋菊右衛門といふ兩替屋があつた。その家の小さい娘が疝を起したので乳母に醫者へつれさせてやると、乳母は歸りに芝居を見にはひつた。時しも春の頃で、小屋の中は人で一ぱいであつたが、五間目の棧敷から、これへくと招く人があつたので、行つて見ると、内儀や中間をつれた田舎武士が、深切さうに席を與へてくれ、色々御馳走をした上に、内儀はおもちやでも買つて上げて下さいと、金子三步を包んで乳母に渡した。

乳母が歸つてその話をすると菊右衛門は大に喜び、その武士へ御禮をしたいと思つたが生憎乳母がその住所をきいて來なかつたので、どうもしようがなくその儘に過ぎた。すると四五日過ぎて件の武士が草履取をつれて店の前を通り過ぎたので、乳母が早速主人にこのことを告げると、主人は手代を

追かけさせて武士をよび入れ、先日の禮を述べて、出来るだけの御馳走をした。するとその御馳走半ばへ、唐物屋小八郎といふものが件の武士をたづねて、急用があるから逢はせてくれといつて来た。小八郎は武士に逢つて、

「一昨日御覽の御茶碗をあなたが百八十兩におつけになりましたので、先方へ申しましたら、京都の玉中といふ人も百八十兩で望むと言ひましたさうで、同じことなら、あなたへ御世話致したいと思ひまして、代金をすぐ届けると申して来ましたから、どうか今御渡しが願ひたう御座います」といつた。「明日まで待つて貰へないだらうか」

「飛脚が今晚たちますので、どうかすぐ様御願ひます」

では仕方がないと、武士は主人にことわつて立ち上らうとした。主人は折角の御馳走がだいなしになるので、百八十兩の金を立替へませうといふと、武士は大に喜んで、金を小八に渡して茶碗を受取り、

「實は私は四國のもので、この茶碗を買ひに来た須磨右衛門と申すもの、只今日本橋の平野屋に居りますから、宿へ歸り次第金を御返し申します。その間だけ茶碗を御預け申して置きますが、金子を持つて来ないものには決して渡して下さいませう」といつた。菊右衛門はそれをきいて迷惑し、「それでは封印をして置いて頂きたい」といふと、武士はいはれる儘に封印をして歸つて行つた。

その日は暮れ、明日になつても、二三日過ぎても茶碗を取りに来るものはなかつた。平野屋を問合せるとそんな人は知らぬといふ返事。さては一ぱい喰はされたかと菊右衛門は残念がつたが、もはや後の祭りであつた。

すると、このことがいつしか大阪中の評判になつて遂に道頓堀の芝居で狂言に取りくまれた。初日より大あたりであつたが、ある日見物人の中から、商家の手代らしい男が、袴をつけ、箱をかゝへて舞臺へあがり、

「この狂言にしくまれた、戸松屋の茶碗といふのはこれです。旦那はこれを見るも口惜しいから御見物の中で打破つて捨てよと私に言ひつけられましたので、この通り微塵に碎きます」

といふが早いか茶碗を取りだして、舞臺へ投げつけた。この話は又もや大阪市中の評判となつた。するとある日先日の武士が立派に着飾つて、戸松屋へ来た。

「この頃は御馳走になり、ことに金子まで借用しましたが、國許から急用があると申して来ましたので、俄に歸つて行きました。こんど再び出て参りましたから封印の茶碗を頂戴して行きます」

と、百八十兩の金を差出した。菊右衛門はその金をよくあらため、

「さやうならばこの通り御返し申します」

といつて、封印のしてあつた茶碗箱を取り出すと、武士は急に蓋面つくつて、すご／＼として歸つ

て行つた。

これはいふ迄もなく茶碗を割つたときいて本金を持参し、又一ねだりするつもりであつたが、智慧の深い菊右衛門はさう来るだらうと見込んで、にせの茶碗を割り、たくみに金を取りかへしたのである。

クラウスの研究によると、かやうな詐欺師は中流か又は下流階級の出が多く、而もその素質に貴族的なところのあるものだといふことである。即ち彼等はその貴族的たらんとする欲望をみたすためにさうした詐欺を行ふのであつた。一般に詐欺師は自惚が強いといはれて居る。

二

以上は詐欺の一般心理の記述であるけれども、主として男性詐欺師を目當として説いたものであつた、女性詐欺師は、男性詐欺師と多少その趣を異にして居る。

詐欺のことを書いた小説、例へば杜鰲新書や晝夜用心記などを讀んで見ると、中心人物として活躍する詐欺師は大てい男である。晝夜用心記の中には三十六の物語が書かれてあるが、そのうち女子が中心となつて働いて居るのは僅かに一つ二つしかない。小説のことであるから、もとより實際の統計とはちがつて居るが、小説も社會事象の反映と見るべきであつて、従つて昔は女詐欺師がおもて立つて活躍しなかつたと見て差支ないかと思ふ。

西洋でも、昔は大詐欺師に男が多かつた。古代ではハーキュリーズ、オヂツセー。傳説中の人物ではあるが、兎に角彼等に匹敵する女詐欺師は見當らぬ。中世ではカリオストロやミュンハウゼン。名を竹帛に垂るゝといふも少しへんであるが、彼等は詐欺師の錚々たるものであつた。ところが近代に至つては、西洋では女大詐欺師が幅を利かせるやうになつた。かの空の金庫で名をあげたフランスのアンベール夫人や、ドイツのクツベル夫人などは、まことに何處へ出しても恥かしくない大詐欺を働いたのであつて、男詐欺師をして顔色無からしめた。これは犯罪學上注目すべき點ではあるけれどもその理由は簡單に言ふことが出来ない。

西洋ではこのやうに男と女とがあべこべになつたけれど、さて、日本では、どうかといふに、遺憾(？)ながら、大詐欺は男の手に買ひ占められて居た。女は甚だ影が薄い。これは日本で女があまり世間へ顔出ししないためであるかもしれない。近頃ほつゝ婦人參政運動の火の手が上がりかけて来たから、そのうちには女の大詐欺師が出るかもしれないが、恐らくそれは遠い將來のことであらう。

さて、歐洲の例によつて、女詐欺師と男詐欺師とについて觀察して見ると、前にも述べたやうに、男詐欺師は變装を巧みにしてかたりを行ふに反し、女詐欺師は少しも扮装などせず、ありの儘の姿で詐欺を働いて居る。空の金庫に、金が一ぱいつまつて居ると吹聴して、人々から巨萬の金を借りたアンベール夫人も、たゞの一度として變装を行つたことがなかつた。

女詐欺師が變装をしないのは決して偶然ではなく、たしかに立派な理由があるのである。といふのは、元來女の顔は生れつき無表情であつて、いはゞ一つの「假面」であるから、ことさらに扮飾する必要がないからである。かういふと或は少し極端かもしれぬが、試みに手近に居る女の人の顔を注視して見るならば、男子の顔よりも遙かに表情が少くない。若し女に表情の多い顔があるとすると、それはむしろ男らしい顔である。日本では昔から男の役者が女に扮装して成功を収めて居るが、強ち理由のないことではない。

表情が少なければ少い程、その心の中にかくされて居る情を讀むことが出来難い。だから女の顔は一つの謎である。従つて、その儘の顔をさらけ出しても容易に人をあざむくことが出来るのである。生れつき顔の形が詐欺に適して居る女は、その心の性質もまた頗る詐欺に適して居る。先づ第一に女子には判断力が乏しい。即ち理性が乏しい。第二に女子には良心の苛責が少くない。第三に女子は空想力に富み、暗示され易い。第四に、女子には子を育てる本能が具はつてゐる。子を育てるには、子をだます必要がある。その他なほ羞恥の感の存在なども詐欺とは縁の深いものである。

更に女子をして人を詐かせ易いものは生理的に存在する月經である。月經の本能はまだよくわかつてゐないが、月經のときの心理状態は一種特別なものであつて、あらゆる犯罪性がこの時期に濃厚にあらはれて来る。中にも詐欺と竊盜の本能とが著しくなるものであつて、萬引婦人の大部分が月經

中であるごとく、詐欺を働く婦人も恐らく月經中のものが多いにちがひない。月經中には、詐欺にしろ、竊盜にしろ、殆んど無意識で行はれるものである。

蛇は寸にして人を呑むの氣があるといはれてゐるが、女子には幼くして、恐ろしい虚偽を言ふものが少くない。ウルフェンの記してゐる例によると、四歳六ヶ月の少女が過つて硝子を割り、召使たちを呼んで、「だれが割つたか」と問ひ、遂には誰それの割つたのを見たときへ言つた。一九〇一年、十五歳になる少女が、ある男をつかまへ、誰それといふ金持ちの若い娘さんが、あなたを慕つてゐるから取り持ちをしてあげませうと言つて、自分で艶書を認めて男に送り、取持ち料をせしめた。遂に男が少女の奸計を感じくと、彼女は最後の艶書に「阿房のお馬鹿さんよ云々」と書いて渡した。

「女郎の誠」に卵の四角、あれば晦日に月が出る」といふ俚諺があるが、通常の女性にさへこの通り「誠」が少いのであるから況んや女郎に於てをやである。遊女梅川は「初めより偽りの勤ばかりに逢ふ人も、絶えず重ねる色ごろも、つひに寄邊となる時は、初めの嘘も皆な誠、とかく戀路には偽りもなく誠もなし、縁のあるのが誠ぞや」(冥途の飛脚)と、大氣焔を吐いたが、初めの嘘を誠にかへるといふことそのことが既に一種の詐欺かもしれない。「耳袋」にこんな話がある。享保の頃、田所町のある名主が傾城をうけ出して女房とした。彼女は箆笥を持つて來たが、そのうちの一つの抽斗にたく錠を下して良人にさへ見せなかつた。良人はそれを快く思はず、色々たづねたけれど、どうして

も中に何がはひつてゐるかを告げなかつた。然し良人はどこまでもしつこく問ひつめたので遂に彼女はその抽斗を開いて見せた。見ると中には袈裟や衣などの佛具がはひつてゐた。良人が驚いてたづねると彼女は涙ながらに、「實はむかし言ひかした男がりましたが、若くて死にましたので、その日から私は出家しようと思ひました。けれど勤の身の自由にならず、さらにかうした大金を出してうけ出して貰ひましたので、御氣にさはつてはならぬと思ひ、今迄かくしておいたので御座います」と語つた。すると、良人は非常に氣の毒に思ひ、それでは今日限り暇をやるから、出家になつて男の菩提を弔ふがよからうといつて暇を出すと、彼女は喜んで立ち去つた。ところが、其後噂に聞くと、彼女はある床屋の亭主と睦まじく夫婦になつて暮してゐたので、名主某は今更乍ら女の奸計に驚いてしまつた。

この例から見ても女の空想力が如何に強くて、狂言を仕組むことが如何に上手であるかを知るに足らう。一九二二年ウィーンのゲレル夫人は養父が殺されて金を強奪されたと警察へ訴へ出たが、警察が取調べを行つて見ると事實無根で、その實彼女が、ある探偵小説を讀んで、その筋書通りに仕組んだ狂言であるとわかつた。

かうして空想力は神経病の際、ことにヒステリーに罹つた場合極端に發達する。一たび空想が働き出すと、とめどなく先から先へと進んで行くものであつて、さうした場合に行はれる詐欺は複雑をき

はめるのである。すべて女性の犯罪は複雑なることをその特徴としてゐるが、而もその複雑さ加減は單に複雑であるといふだけで、深遠な計畫によつて複雑を極めてゐるといふのではない。ことに女性

は甚だ口やかましいものであるから、事を複雑ならしめるには頗る都合よく出來てゐるのである。

女性の空想力はその性的生活と深い關係をもつてゐる。一般に女性の性的生活はいはゞ受身である英語でいへばアクチヴではなくパッシヴである。この性的生活の受身であるといふことが、空想力を培ふ大きな原因となるのである。男子の性的生活はアクチヴであつて、男子は比較的自由に性慾を満足せしめるが、女子に於てはさうはいかない。従つてこの性慾の不満が、空想力を上へ上に刺戟し發達させる。男子でもさういふ場合色々の悪だくみを始める。「小人閑居して不善をなす」の閑居は性慾の満足を得難い状態であると解釋して差支ない。性慾をほしいまゝに満たしてゐる男子は通常至つて空想力にとほしい。即ち極めてブラックチカルである。ところが女子は却々ブラックチカルな人間になり得ない。例へばこゝにある犯罪事件が突發して犯人が知れぬとき、男子と女子とを選んでセオリーを立てさせて見ると、男子はブラックチカルな説を立てるに反し、女子は極めて、こみ入つたロマンチックな説をたてるにちがひない。いづれにしても女子の空想力は夕立雲のやうに油然たるものであつて、一たびその空想力が詐欺としてあらはれるやうな場合は、性的生活もまた大なる活動をはじめ、露骨なる性的行動となることがある。

この間の消息は、かの「結婚詐欺」に明かにあらはれてゐる。結婚詐欺とはいふ迄もなく、美しい女が囮となつて、男と結婚すると見せかけ、男から金をしほり取り、いゝ加減の時に「おさらば」を極めこむことを言ふのである。尤も結婚詐欺は女子に限らず男子によつて、行はれる所であるが、男子の行ふ方法は頗る簡單でいはゞあつさりしたものであるに反し、女子の行ふ方法は、こつてりしてゐて、如何にも複雑で且つ甚だ大仕掛である。千八百八十年、パリーのセン・ゼルマン街で、ドモルチエといふ女が結婚媒介所を立て、リールといふ英國の女を囮に結婚詐欺を行つたときの如き、随分澤山の男がひつかつて多額の金をしほり取られた。つい近頃（一九二一年）、ライプツヒでも頗る大仕掛の結婚詐欺が行はれた。

結婚詐欺ばかりでなく借金詐欺もまた女子によつて行はれる所である。前記アンベル夫人の空金庫の詐欺も一種の借金詐欺である。ドイツの女大詐欺師クツペル夫人もやはり借金詐欺で名をあげた。日本では先年、通稱石井某といふ男が株式責任買といふことをして一種の借金詐欺を行つたが、若し彼が女であつたならば、あんなに早く化の皮があらはれなかつたかもしれない。ドイツのスピツエーデルといふ女が行つた借金詐欺は、投資する人たちが彼女の處置に隨喜して、有難涙をながして惜しい金を泡ぶくにしてしまつた。

最後に女子の詐欺として特有なものは、人々の迷信を利用する詐欺である。これは西洋にも東洋に

も昔から甚だ多かつたもので、所謂巫女と稱して、人々の迷信に乗じて私腹を肥した女は枚擧に遑がない。尤も男子が主謀者となつて、女子はほんの囮としてつかはれた場合もあるけれど、女子が單獨にしかも大仕掛に所謂宗教詐欺と稱すべきものを行ふことは近代に至つてもその跡をたゞない。例へばかの、目今歐米で騒ぎ立てられてゐる「クリスチアン・サイエンス」の如き、祈禱によつて萬病を治療すると稱して多數の生命と金とを犠牲とした「クリスチアン・サイエンス」の創唱者たるエツヂー婆さんも犯罪學的に論ずれば一種の詐欺師と見るべきものであるといはれてゐる。總じてかやうな女は強度のヒステリーにかゝつてゐる。天理教や大本教の宗祖なども、調べて見たら恐らくヒステリーのばき／＼であつたにちがひない。尤も天理教や大本教が一種の詐欺であるといふのでは決してない。たゞかやうな教は女子の強い空想力から生れたものであると斷言しても差支ないと思ふのである。

犯罪心理と婦人

菱田ながしの八人殺しは、最近日本で行はれた犯罪のうち、最も大なるものゝ一つであつた。彼には生れながらの犯罪性もあるらしいが、彼の犯罪の直接の動機は彼の愛した一女性に對する嫉妬の

ためであつて、私たちは今更ながら「犯罪の蔭には女あり」といふ言葉をしみく感ぜしめられたのである。

菱田事件は始めから犯人が判明して居たために、犯人探偵といふ側から見ればさほどの興味もなかつたが、ある犯罪が行はれて、その犯人の知れぬ場合には、通常まづ、犯罪の蔭にひそむ女を探す必要がある。それ故西洋でも *Cherchez la femme* (女を探せ) といふ言葉は探偵たちの大切なモットーの一つとされて居る。

この「シエルシエ・ラ・ファンム」といふ言葉は、單に犯罪の動機の捜査上必要であるばかりでなく、女子は秘密を守り難いために、女子を通じて、犯罪にまつはる大切な秘密を聞き出し得るから極めて必要なものである。名判官といはれた大岡越前守などは、この邊の消息をよほどよくのみこんで居たらしく、越前守ばかりでなく、日本でも西洋でも名探偵といはれた人は皆さうであつて、フランスの名探偵マセーの如きは「女性犯罪者」といふ書をあらはして、彼が女性犯罪心理研究の奥深さを示して居る。

女子が秘密をばらし易いといふのは、カントの説破したやうに、自己の秘密ではなく、他人の秘密をばらし易いことをさすのである。然らば何故に女子が他人の秘密をばらし易いかといふに、女子が一般に口數が多くて意志が弱いためであるといふよりも、むしろその智能が比較的乏しいためである

といはれて居る。ある場合に、女子は情に於ても意志に於ても、昔から「女の一念」といふ言葉の通り、男子よりも遙に強くなるものであつて「弱きものよ汝の名は女なり」といつたシエクスピアの言葉が眞であるならば、それは、女子の智能が乏しいといふ弱點を指したものであるといふべきであらう。女子には論理の力がない。従つて推理の力によらないで、直覺によつて物ごとを理解する。女子が他人の秘密をばらし易いのも、要するにその秘密の價値を判断する理性の力に乏しいからである。即ち秘密を洩したために、他人にどれ程の害を與へるか、どんな大事件を惹き起すかといふ見込がつきかねるのである。

それ故、犯罪探偵に従事するものはその事件に關係して居る女子を探して、事件の秘密を聞き出す必要がある。然してこの際注意しなければならぬのは、女子の語る他人の秘密が、屢ば真相から遠ざかつて居ることである。言葉を換へていふならば、女子は自分にきかされた秘密をそのままに傳へないで、大分變化して傳へるのである。例へば男が女に秘密を打あけると、一から十まで委しく語るといふやうなことはしないから、女は部分的にきかされたことを想像で補ふために、こんどそれを他人に告げる場合には、始め男からきかされたものとはよほどちがつて來るのである。

さて、この弱點を除いて考へると、女は犯罪に於ても極めて強いものであつて、ある場合には男は女の玩具となるやうなことがある。ユーゴーは「天は凡てのものにそれく玩具を與へた。人形を子

供に、子供を男に、男を女に、女を悪魔に」と喝破したが女子の犯罪は時として男の及ばぬ程大膽で残忍で且冷酷なことがある。ことに男子と女子とが共同して犯罪を行ふやうな場合には、女の強さがまざるとあらはれるものである。私はさうした場合の女の強さを示すために、シエクスピアの描いたマクベス夫人の犯罪心理を次回に述べようと思ふ。

二

シエクスピアの戯曲の中には犯罪を取り扱つたものが少くないが、中にも「リチャード三世」「オセロ」「マクベス」の中にはいろいろの犯罪心理が遺憾なく描かれてある。「即ちリチャード三世」には、リチャード三世といふ先天的犯罪者の特徴、ことに不具と犯罪との關係が、「オセロ」には、嫉妬による男子の犯罪が、「マクベス」には、男女共犯心理が極めて巧にうつされてゐるのである。私はこれからマクベス夫人の犯罪心理について述べようと思ふ。

マクベスは戰場からの歸りがけに妖婆に逢ひ、妖婆が「王さまとならつしやる」と言つた豫言をきいて、スコットランド王ダンカンを殺して王位を奪はうと決心する。そして妖婆の豫言の事をマクベス夫人に手紙で知らせてやる。夫人はその手紙をよんで、直に良人の心を見抜き、良人の非望を遂げさせようと決心するのである。即ち國王ダンカンを殺さうと計畫したのはマクベスであつて、夫人は別に王妃とならうといふやうな野心は持つて居なかつたのであるがマクベスの心を見抜いて、愛する

良人の爲めに、どこまでも初志を貫かせようとしたのである。ところが夫人はマクベスの弱點をよく知つて居る。即ちマクベスには、非望を懐いてもそれを遂行するだけの横道な心のないことをよく知つて居るために彼女は言葉を盡してマクベスを鞭撻するのであつた。「ちや先刻まで身に着けていらした彼の「希望」は、ありや正氣ぢやなかつたですか？ あの「希望」が、あれから一睡眠したのですか？ さうして今日を覺して、先刻は平然として正視し得た事を、馬鹿な顔して、眞蒼になつて見てゐようといふのですか？ ……今日からは、わたしに對する貴郎の愛情もそれに同じだと思ひます」と夫人は愛情を引き出して彼をほけまし、なほ、「思ひ切つてお打明なすつた時こそ、貴郎は男子であつたのです。だから、それより以上の事をなされば、いよくますます男子らしくおなりです。(中略) わたしは乳汁を飲ませたことがありますから、赤兒の可愛さは善く知つてゐます、けれども、若しわたしが、貴郎がお誓ひなすつたやうに一旦斯うしようと誓つたなら、其赤兒が、わたしの顔を見て、莞爾してゐる最中だつて、其ふよくした齒齦から無理やりに乳首を引奪つて、其脳髓を叩きつけて微塵にして御覽に入れます」と焚きつけるのであつた。實に女性の一念の物凄さはこの言葉に盡きて居ると思ふ。

男女共同の犯罪に就ては、多くの場合男子がその計畫者である。計畫者であつても、屢々之を遂行するだけの辛抱がない。かやうなとき、女が男を眞に愛して居るならば、却つて女は男を無理にも引

き摺つて行つて、その計畫を遂行させる。マクベスもとうとう夫人に引き摺られて行つて、國王が自分の城にとまつた夜、その寢込みを襲つて短刀で殺した。そのとき夫人は酒の中へ毒をまぜて従者を眠らせたが、若し國王の寢顔が、夫人の父の顔に似て居なかつたならば或は夫人自身が國王を刺したかもしれない。このことは可愛い赤兒でもたゞき殺すと言つた心と矛盾して居るがこの矛盾したところに女性心理の特徴があるといへる。良人を殺すために毒を與へて置き乍ら良人の苦しむの同情して熱心に看護するといふやうなことは女性毒殺者に屢々見られた現象である。

さて、マクベスは國王を刺してから、良心の苛責のためにすつかり氣が轉倒してしまつた。之に反して夫人は益々冷靜になつて、短刀についた王の血を従者の衣服に拭ひつけた。かうした場合、意志の強さにかけては、男は到底女にかなはないのである。犯罪學者ウルフエンが女子の意志は兇行の後に非常に強くなるといつて居るのは、蓋し至言であると思ふ。一九〇六年ドイツで、ブレイメル夫婦が下宿人ロースを殺したとき、妻は良人とその弟がロースを地下室へ連れて行つて殺す間、玄關に番をして居たが、兇行がすむと、自ら死體に近づいて、エンゲージ・リングのついて居る指を鋸で切り落し、死體の身許のわからぬやうに工夫した。

女が、愛する男に加勢して犯罪を行ふとき、必ずしもマクベス夫人のやうに行動するとは限らないけれども、しかも、かやうな犯罪心理は女子に特有であるといつてよい。

前回に私は男女共犯の際に於ける女子の犯罪心理について述べたから、これから女子單獨の犯罪心理について書いて見ようと思ふ。

意志に於て男子よりも遙に強くなり得る女性も、直接行動をとる勇氣にかけては男子に及ばない。ことに兇器を揮つて、にくむものを殺さうとするだけの腕前が、多くの場合缺けて居る。さういふ時うらみを晴らすために、女性は如何なる手段をとるであらうか？ この質問に對して、精神病學の泰斗メビウスは、「女子の武器はその舌である」と答へた。いかにもその通りであつて、女子がその犯罪的慾望を充すに用ひる最初の兇器は舌である。即ち女子はにくむものに對して、あらん限りの毒舌を揮つて誹謗し、或は誣告をする。時には舌の代りに筆を用ひ、無名の手紙を發して、さんぐくに相手を悩まさうとするのである。

それ故女性の犯罪方法は、一口にいふと「間接」である。昔からよく行はれた「丑の時詣り」は、その最も適切な例であつて、女性の犯罪心理を遺憾なくあらはして居るといつてよい。「丑の時詣り」によつて、果してにくむものを呪ひ殺すことが出来るかどうかを、胸に手を當てて考へて見る餘裕さへない。かつとのほせ上つたが最後、その場で思つたことをやつつけてしまはうとするのである。ルールは「ド・リユマニテ」の中で、「若し罪人を女子の前に連れてくるならば、女子はかつと怒つて殺

しかねないが、その怒りの静まるのを待つならば、どんな犯人をもゆるしてしまふ」といつて居る通り女子は自ら犯罪を行ふに當つても多くは衝動的に振舞ふのである。

女性の犯罪は間接な方法を以て行はれ易いと同時に、その犯行が極めて執拗である。例へば時として無名の手紙が一本ならず數十本数百本發せられることがある。言葉を換へていふならば、犯行に所謂「残忍性」を帯びて居る。即ち十分にも十二分にも相手を惱まさうとする。毒殺は西洋で、女子の一手販賣であるといはれて居る程、女性にふさはしい犯罪方法であるが、その毒殺が、時として、數日乃至數十日に亙つて、所謂真綿で頸をしめる式に、行はれることがある。だから「弄り殺し」は女子に特有なものだといつてよい位である。女子のこの残忍性を、女子の痛覺が男子よりも鈍いこと、従つて道徳心の缺けて居ることによつて説明しようとする學者もあるが、無論それも大いに關係を持つて居るけれど、その外に、弱いものが、強いものに對する反抗心のあらはれたとも考へることが出来る。だから女性の犯罪は過度に趨き易い。前後の反省のない爲に、發覺の怖れをも忘れて途方もない深入りをする。高橋お傳やブランヴェイリエ公爵夫人の犯罪は其著るしい例である。従つてまた女性の行ふ犯罪は時として複雑を極める。このことは犯罪探偵といふ點から見れば甚だ大切であつて、犯罪が見た所非常に複雑して居るときは、先づ犯人として女子を考へて見なければならぬ。然し女子の犯罪は、たゞ複雑であるといふだけに、難解であるといふのでは決してない。女子が

犯罪を複雑ならしめるのは、いはば蛇足を畫くに過ぎないのであるから、却つて探偵の際には都合がよい。女子は無意識に行動するときには賢いが、考へて行動するときには愚かである」といふ西洋の諺も、亦「女賢くして牛賣り損ふ」といふ言葉も、この點から見ると至極尤もである。

女子の理性が比較的發達して居ないことは、解剖學的に見て、女子の腦髓ことにその前頭葉と顳葉の發達の少いこと、關係がある。一口にいへば女の頭は男より小さい。その代りに女子の骨盤は男子のそれに比して遙に大きい。これは勿論、女子が子をばらみ育てるためではあるが、同時に女子とその性的生活とが深い關係を持つて居るともいへる。實際女子の犯罪心理を知るにはその性的生活をよく理解せねばならぬ。

四

女子の性的生活と犯罪心理との關係を、短い紙面で十分述べることが出来ぬから、私は以下主として、月經と犯罪心理との關係を述べようと思ふ。

月經は女子にとつて、一の生理的な現象である。生理的ではあるが、大ていの女子は月經の際、多少の不快感を覺えるものであつて、例へば全身に疲労感があつたり、身體の方々が痛んだり、頭痛がしたりする。最近ドイツのある學者の研究によると、月經の直前及び月經の初期にある女子の血液の中には一種の毒性物質が含まれて居ることがわかつた。その證據に、ある一定の植物の種子を發芽せ

しめ培養して見るに、月経婦人の血液を加へた培養液内では、通常の女子の血液を加へたものゝ中に於けるよりも芽の發育の度が遙に悪いのである。それ故月経婦人の血液の中には、一種の毒性な物質があるといふのである。而もこの毒性物質は「ヒヨリン」と稱するもので、汗や唾の中へもあらはれるといふことであつて、歐洲に昔から、月経婦人が草花に觸れると花がしほむといふ言ひ傳へのあるのもこの毒性物質のためだとさへ説明された。

このことはまだ研究が新しいために、一般に承認されてはゐないが、兎に角、月経中女子の身體にある種の變化の起ることはたしかであつて、單に肉體の變化ばかりでなく、精神にも可なり強い變化が起るものである。そしてこの月経中の精神的變化が、女子の犯罪心理と密接な關係を持つて居るのである。

一般に男でも女でも、病氣にかかると、感覺が鋭敏になるものである。例へば頭痛のするときには聽覺が鋭敏になつて、少々の物音でも、がんと頭へひびく。又、腫物でも出來て居る部分の皮膚は、觸覺が非常に鋭敏になつてゐる。昔から、詩人や文豪たちが、病氣のときインスピレーションを得たといふ話はよく聞くことであるが、これも或程度迄は病氣のために感覺が鋭敏になつてゐるためだと解釋することが出來よう。女子の月経も、生理的ではあるけれども前述べたやうに病的の現象を伴ひ易いからして、一種の病氣と見なして差支なく、従つて月経中の婦人は、平素聞き得ない音まで聞き

嗅ぎ得ないものまで嗅ぐことがある。それ故裁判や探偵の際、證人として女子を呼び出して訊問するときには、この點をよく注意して置かねばならぬ。感覺があまりに鋭敏であるため、時として認識に狂ひを生ずる。従つて月経婦人の見たり聞いたりしたことは、眞實と遠かつてゐる場合が少くない。

そこで探偵なり裁判官なりは、婦人を訊問する際、その女が犯罪の行はれたとき月経中であつたかどうかといふこと、及び現に月経中であるかどうかといふことに氣をつけねばならない。若し犯罪の行はれたときに婦人が月経中であつたならば、訊問に際して、實際に認識した以上のことを述べ易く又訊問しつゝある時に月経中であるならば、實際見た以上のものを見たやうに思ひちがひをし易いからである。

然しこのことは從來兎角看過されて來たのであつて、婦人の證言が、時として、恐ろしい裁判の誤りを來したやうな實例は決して少くないのである。單に證人としての場合ばかりでなく、婦人が物を訴へ出たときに、若し月経中であるならば誇張せられ易く、又各種の犯罪の行はれた際にも、次回に述べるやうに、月経と關係のあるものが少くないから、この點を注意しなければならぬ。

それ故、證人として女子を訊問するときにも、又、女子からある種の訴へ出があつたときにも、なほ又女子によつて犯罪が行はれた時にも、四週間即ち次の月経期の初まるを待つて、その間その女子の心理状態を観察するのが最も安全である。「婦人の取調べの際には四週間待て」といふモットーも、

犯罪探偵の際には大切なものであるといつてよからう。

五

刑務所の中では時々囚人が暴動を起すことがある。暴動といつても、囚人が各自に暴れる事であつて、男囚ばかりでなく、女囚も週期的に暴動を起すものである。カーペンター女史はその著「女囚生活」の中に次のやうな、女囚と女看守との會話を擧げてゐる。

「今晚あべれますよ」と女囚。

「馬鹿をお言ひでないよ」と女看守。

「たしかにあべれますよ」

「なんのために」

「たゞあべれて見ようと思ふのです」

「誰か腹の立つことでも言つたの」

「いゝえ、もうくゝあべれたくて仕様がなないので。退屈ですもの」

「あべれたら、暗い所へ行かねばならんがいの」

「暗いところへ行きたいんですよ」

「かうした會話の後、案の如くその夜女囚は窓ガラスを破り割り寢臺をひつくりかへし、看守がとめ

に行くとき、叫びまはりかきむしつて抵抗するのである」と女史は書き添へてゐる。

ニコルソンは女囚のこの暴舉に就て研究した結果、多く月經期に起ることを發見した。ネツケはこの説に賛成しないけれども、兎に角月經の際、女子の感情は非常に不安定になるものであつて、前記の會話は月經の際の女子のいらくした氣持を遺憾なくあらはしてゐると言つて差支ない。

イタリアの犯罪學者ロンブローは月經中の女子は怒り易く又嘘をつき易い事を認めた。氏は警官に抵抗して逮捕された八十人の婦人に就て取り調べたところ、月經中でなかつたのはたつた九人であつた。平素正直な婦人が別に深い理由もなく、見え透いた嘘をいふやうな場合は、多くは月經の然らしめる所である。無いことをあるやうに訴へること、例へば、強姦されもしないに強姦されたと訴へることは、よく新聞などに書かれる事實であるが、かやうな誣告の目的は既に述べたやうに復讐のためである場合が多いが、誣告をなさしめる直接の動機は月經中の變態心理であることが少くない。明治四十二年の春、日本橋のある藝妓屋の、十五になる雛妓が、入湯の歸り途で、その頬を切られたと訴へ出たので、警察では苦心して犯人を探したが知れず、後にその雛妓自身が、われとわが頬に傷をつけたのであるとわかつた。彼女は藝が出来ぬといつて家人に吐かれたため、はじめ家に放火しようと思つたが果さず遂にさうした愚かな行爲に出たのである。彼女が果して月經期にあつたかどうかは知る由もないが十五といへば、月經の始まる頃の年齢であるから、或はさうであつたかもしれぬ。

次に月経中の婦人はよく萬引をやる。心がいらく／＼してゐるに加へて誘惑に打勝つ抵抗力が減少してゐるため、ついで盗みを行ふのである。勿論凡ての萬引婦人が月経中とは限らぬけれども、若し變態心理の爲めに行はれた犯罪であるとしたら、情狀酌量の餘地があるから、注意すべきであらう。

以上は精神健全な婦人の月経中に起る現象であるが、多少神経に異常のある婦人には、月経中かやうな現象が極めて著しくあらはれる。ヒステリックな婦人は月経中萬引を行ふばかりでなく、時としては放火を行ひ、また殺人をも敢てする。而もそれ等の犯罪は多くは無意識の狀態、即ち所謂朦朧狀態で行はれるのである。かういふ狀態が段々進んで行くと、遂には放火狂、竊盜狂となるのである。月経中はかりでなく、妊娠、産褥の女子もそれに似た精神狀態を起し易いから、「殺兒」などの時にはこのことを考慮に入れて裁判すべきであらう。いづれにしても、婦人の犯罪とその性的生活とが密接の關係を有することは、争はれない眞實である。

迷信による婦人の犯罪

一般に犯罪者の中には迷信家が多いが、中にも女性犯罪者にはその傾向が著しい。嘗てケラー嬢の検査したところによると、女性犯人百人のうち六十七人は夢に見たことを眞實と信じ、二十五人は身體的豫兆、たとへば、手が痒いと金かはひるといふやうなことを信じ、十五人は幽霊の實在することを信じて居たといふことである。女性犯人と同じく、娼婦の中にも迷信家の多いことは、花柳界で縁起をやかましくいふ習慣のあることを見れば明かであるが、單に女性犯人や娼婦ばかりでなく、通常の女子も男子に比較すると、遙かに多く迷信的である。ヒステリーに罹つた女子は夢を信じたり、宗教に溺れたりし易いが、大抵の女子が多少ヒステリー的であるといふことから考へて見れば、思ひ半ばに過ぎるであらう。

さて、迷信と犯罪とは極めて深い關係を持つのであつて、時には迷信のために随分怖ろしい犯罪の行はれることがある。歐洲では人間の體内の脂肪で作つた蠟燭をともして竊盜にはいると、家人を熟睡せしめることが出来るといふ迷信があつて、それがために墓場をあばひたり、時にはわざ／＼人を殺して脂肪を煮ぐり取つたりする犯罪が屢ば行はれた。又人間の生血は癲癩をなほすといふ迷信があつて、それがため癲癩患者が人を殺したことは決して稀でないのである。なほまた歐洲では、大犯罪者の生血は萬病に效があつて、之を温かいうちに飲むと老人を若返らしめるといふ迷信があるので、ドイツあたりの死刑場には、死刑の行はれるとき、群集がかけつけて、斷頭吏から殺したばかりの囚

人の生血を買つて、その場がぶく飲むものさへある。ことに、買った血液よりも、盗んだ血液の方がよく効くといふので、夜陰に乗じて斷頭臺のそばにしのび寄り、血液の雫を盗んで行くものがあるが、しかも、かやうに盗みに来るものは多くは女子であるといはれて居るところを見ると、女子には迷信家の多いことを知るに足らう。

第十七世紀の終り頃から第十八世紀の始めにかけて、ハンガリーのネダスチー伯爵夫人は従者たちと共に謀して、およそ六百人の少女を城内に連れこんで殺し、その血をしほつて風呂をたて、それに浴して若返りを行つたといふことである。これなどは迷信による婦人の犯罪の白眉といつてよからうと思ふ。

二

さて、女子が人を殺さうとするやうな場合に、その選ばうとする手段は、多くは間接の方法か、又は間接に近い方法である。それは即ち、女子には兇器を自由につかふだけの膂力と技倆とが缺けて居ることと、血を見るのを比較的好まないことによるのである。それゆゑ直接の殺人方法として女子に選ばるる手段も、毒殺のやうに力のいらぬ血を見ない方法が一ばん多いのである。犯罪學者間で、毒殺は女子の一手販賣であるときへいはれて居るのも、強ち過言ではあるまいと思ふ。

間接の殺人方法として、昔から女子の好んで選んだ迷信的方法の中に、所謂「丑の時詣り」なるも

のがある。現今ではあまり丑の時詣りの話をきかぬが、昔は随分眞剣になつて行はれたのであるらしい。丑の時詣りによつて果して所期の目的が達せられるどうか、少し考へて見ればわかることであるが、嫉妬に眼のくらんだ女性も兎にも角にもやつて見ようと思つたにちがひない。現今の婦人の中にも、嫉妬のために、丑の時詣りでもしてやらうかといふ激しい欲望に驅られる人は恐らく少なくないであらうと思ふ。さういふ人のために丑の時詣りの方法を説明する譯ではないが、丑の時詣りといふのは、その名の示すがごとく、草木も眠るといふ午前二時頃に、殺してやりたいと思ふ人に見立てた薬の人形を携へ、白装束に下げ髪で、頭に四本の蠟燭をともし立て、足に一本歯の足駄を穿いて、手近な神社の森に行き、その中の古い大木に人形を釘付けにし、七日間毎夜同じ時刻に人形に釘を打込むのである。すると先方は七日目に悶絶して死ぬといふことであるが、科學的には無論説明がつかないから、果して効があるかどうかを私は保証することが出来ない。平家物語に、

「嵯峨天皇の御宇に、ある公卿の息女、あまりに嫉妬深くして、貴船の社に詣つて、七日籠りて申すやう、歸命頂禮貴船大明神、願はくば七日籠りたるしには、我を生きながら鬼神になしてたび給へねたまひしと思ひつる女とり殺さんとぞ祈りける。云々」

とあつて、丑の時詣りの最も古い記録の一つとなつて居るが、嵯峨天皇の御宇以前にもかうしたことがあつたかもしれない。文政の頃、切支丹お蝶と綽名をとつた女賊が、自分を振捨てた寺小姓を呪

ふために、谷中の一本杉の洞の中に、若衆姿の薬人形をする置き、釘を打ちこむ代りに、その頃江戸で流行した銀の平打の簪を女人衆からすり取つて、毎夜打ちこんだ話は名高いが、お蝶かなぜ鐵釘を打ちこまなかつたかといふに、鐵の釘ではさぞ痛からうと思つたからで、呪ひ殺したいと思ひながらも可愛い男に痛い思ひをさせたくないといふ所に女性の特有な心理が顯著にあらはれて居る。良人に毒を與へて置きながら、苦しむ良人を心からいたはり看護するといふやうな例は稀ではないが、それとこれとは同一の心理といふことが出来る。

千年を経た男鹿の脂肪を空青石の水を以て調合し、それを燈明にあけて御祈禱をすると、にくむ相手が鹿になるといふ迷信も、その昔日本にあつたと見えて、淨瑠璃「祇園女御九重錦」の中に、忠盛の妻池殿が、祇園女御を呪ひ殺さうとする所に、この方法が書かれてある。

日本ばかりでなく、西洋でもこれに似たことは古くから行はれて居た。すでにギリシヤ、ローマの昔に「呪の札」といつて、にくむもの、繪像を書いて、それに釘をさしこむことが行はれ、また第十二世紀頃から、祈禱によつて、人を殺すことが盛んに試みられたのである。有名なフランスの毒婦ゾアアザンは、赤子を殺すために、ギーブルグといふ僧とはかつて、度々殺人の祈禱を行つたといはれて居る。

丑の時詣りにしろ、殺人祈禱にしろ、もとよりその効果があらうとは思はれぬが、それにも拘はら

ず熱心に行はれたといふことは、女子が如何に迷信的であるかといふことを知るよい證據であらう。

三

わが國では昔から丙午の年に生れた女は必ずその良人を食ふといふ迷信があり、また庚申の日に孕んだ子は必ず盜賊になるといふ迷信がある。この迷信がもとよつて、從來いろいろ犯罪が行はれた。最も多かつたのは丙午の年に女の子が生れると、母親がひそかにその子を窒息せしめて殺すといふ犯罪であつた。岡本綺堂氏の「半七捕物帳」の中の一編「松茸」の中に、この迷信にまつはる犯罪が巧みに描かれてゐるが、昔の人はかなりこのことを氣にしたものらしい。曲亭馬琴は「燕石雜誌」の中に、丙午、庚申の迷信の無意義なことを力説して居るが、現今でも、この迷信がある種の悲劇のもととなることは屢ば耳にする所である。

狐つきの迷信も可なり根づよくはびこつて居る。大正六年、島根縣で、二人の息子がぶらぶら病にかつたのを狐がついたものと誤信し、唐辛子を燻して狐を追ひ出さうとし、二人とも殺してしまつた母親があつた。その際嫂も手傳つて唐辛子を燻したが、母親も嫂も、二人の死んだのをやはり狐の所爲だと信じて疑はなかつた。

易者や豫言者の言を信じて犯罪を行ふ女子も少くない。一九〇六年、ドイツで或る女がわが家に放火したが、それは、ジプシー豫言者から放火しなければ凶事が起るといはれたからであるといふ。

かうした犯罪は、女子が迷信的である限り、恐らく將來と雖もその跡をたゞぬであらう。

冤罪に苦しんだ東西の女性

自ら犯さぬ罪のために、私刑公刑を受けた例は、昔から今までどれほど数多くあつたかしのれない。さういふことのないやうに、今日では、よほど慎重に裁判を行ふことになつて居るけれども、なほ且冤罪のために公刑を受くるものは少くないのである。況んや公の裁判にまで持ち出されない冤罪はどれほど澤山あるかわからぬ位である。

女性の苦しむ冤罪の最も普通なのは、いふまでもなく、男子の邪推または嫉妬による、所謂「濡れ衣を着せられる」場合であつて、昔から、文學的作物の中に屢ば取扱はれて居る所である。

既にギリシヤ神話の中にアポローが鴉の虚言を信じてその妻コロニスに殺す話がある。山村に住んだアポローは、用事が出来てバーナツサスの宮殿へ行つたが、妻子の消息を知るために、年來飼つて居た鴉を使者として毎日告げしめた。鴉はその傾色が眞白で、よく人間の言葉を話すことが出来たのである。鴉は毎日コロニスの所からアポローの所へ飛んで行つて、その肩の上にとまつて、「コロ

ーニスは無事です」と告げた。ところが、ある日、鴉は息をはずませながらとんで来て、「コロコーコー」といふのみであつた。アポローが驚いて、「どうしたのか？」ときくと鴉は「コロニスの所へ男が……」といひかけた。これをきいたアポローはカッと怒つて、銀の弓箭を取るなり、我が家をさして走りかへると、家の手前の森の中に白い衣服を纏つた人の姿が見えたので、さてはと思つて箭を放つと、手答へあつて白衣の人はたふれた。近づいて見ると豈はからんや、それは最愛のコロニスで、彼女はアポローを迎ひに森まで出て来たのだと察せられた。アポローが今更ながら悲歎の涙にくれて居ると、件の鴉がとんで来て「コロコーコー」と言つた。怒つたアポローは、「これも皆貴様のためだ、今日から貴様は罰として、「コロコーコー」としか言へぬやうにしてやる。また羽も眞黒にしてやる」と言つた。——これが今日の鴉の起原であるといふ。

「一千一夜物語」の中にもこれに似た話がある。バクダッドに、十一年連添つて三人の男兒を儲けた商人夫婦があつた。あるとき妻が病氣になつて、頻りに林檎を食べたが、生憎バクダッドにはどの市場にも一つもなかつたので、商人は往復二週間もかゝるバルソラまで行つて三つの林檎を買つて戻つて来た。ところが、もうその頃には病人は林檎を食ひたくなかつたので、枕許に並べておいて、それを見ては楽しんで居た。

数日の後、商人が市へ出て商賣をして居ると、一人の黒人奴隷が林檎を持って彼の店へ入つて来た。

商人はバクダッドに林檎のないことを知つて居るので、ハツと思つて、黒人に訊ねると、黒人は、これは自分の女が呉れたのだ、彼女は今病氣で寢て居るが、愚かな良人はこの林檎を二週間もかゝつて買つて来たのだと語つた。商人が驚いて歸宅すると、妻の枕許には二つの林檎しかなかつた。もう一つの林檎をどうしたかと訊ねると、患者は知らぬと答へた。かつと怒つた商人は刀を抜いて妻を刺殺し、屍體を箱へ詰めてチグリス河に投げに行つた。

家に歸ると末の子が門口で泣いて居たので、どうしたのかと商人が尋ねると、今日、母の枕元の林檎を一つ内證で持ち出して街で遊んで居ると、黒人が来てそれを奪つて行つたので、追ひかけて行つてその林檎のわけを話したけれど歸してくれなかつたから悲しいと答へた。——商人の後悔はいはずもがなである。

かうした事情を取扱つた文學の中、最も名高いものは、シエクスピアの「オセロー」であらう。イヤゴと稱する腹の悪い男の讒言によつて、妻のデスデモーナが他の男と姦通して居ると邪推して之を殺し、後真相がわかつて後悔のためにオセローは自殺する。

冤罪のために裁判を受け、時に重刑を課せられた女性も東西の裁判史上にその例は少くない。

支那の漢代に趙といふ人の妻が、若くして良人を失ひ、子がなかつたけれども、姑の寂しさを思つ

て、麻をうえ、機を織つて、孝養を盡した。姑は嫁を不便に思つて、自分さへ居なければ嫁は幸福になれるのだと考へ、あるとき、嫁の留守中に縊死した。その姑に一人の娘があつたが、娘は嫁が母親を殺したのだらうと思つて、鎮臺に訴へ出たところ、鎮臺は碌に詮議もしないで嫁を死刑に處した。

すると、その地方はそれから三年間、雨が一滴も降らず、大飢饉となり、鎮臺は交代したが、新任の鎮臺は、ある博士に占はせると、罪なくて殺された嫁の祟であると言つたので、嫁のために塚を立てて祀り、讒訴した娘を罪に行ひ、前の鎮臺の官を剥いだら、天も納得したものか、豪雨があつて、萬物が甦つた。

この話が種になつて居るかどうかは知らぬが、俗に「大岡政談」と稱する中に「津の國屋お菊の件」といふものがある。

江戸神田に津の國屋松右衛門といふ小間物商があつたが、病氣のため父子相次で死に、あとに残つた姑と嫁のお菊とが、貧困な生活を送つた。ところが姑も程なく、大病にかゝつたので、お菊は随分苦勞をして姑につかへ、附近のほめ者となつた。姑の一人娘はお糸と言つて、淺草田原町の花房屋吉の家へ縁附いて居たが、どうした譯か二年越しの母の病氣を碌に見舞にも來なかつた。ある年の暮に、どうにも遺縁がつかぬのでお菊がお糸の家へ金を借りに行くと、お糸は無情にもそれを斷つた。

お菊が悲しい思をして歸つて來ると、姑が留守中に縊死して居たので、大に驚いてお糸の所へ報らせると、お糸夫婦はお菊が姑を殺したものだと思つて訴へ出た。

幸に裁判官が大岡越前守であつたので、お菊は却つてほめられ、お糸夫婦はお目玉を頂戴した。

歐洲の裁判史上に名高い女性の冤罪事件は不思議にも毒殺に關係したものが多し。フランスのラファル夫人事件、英國のメープリック夫人事件、ベートルット夫人事件などがそれで、この三人の夫人はいづれもその良人を毒殺したものととして逮捕され裁判されたのである。このうちベートルット夫人だけは無罪の宣告を受けたが、他の二夫人は有罪の宣告を受けて獄に投ぜられた。

ラファル夫人の結婚生活は、はじめからあまり幸福なものではなかつた。彼女は、良人ラファルジが金持ちだと聞いて結婚したのであるが、その實ラファルジは却つて彼女の持參金を宛にしたくらゝであつた。一家はグランヂエと稱する田舎に住つたが、一八三九年、ラファルジはバリーへ職を求めに出かけた。留守中、夫人は自分の肖像畫が出来たので、それを姑の作つた菓子と共に良人に送つた。姑の作つた菓子は五つ六つあつたが、バリーへ届いた菓子は大きなのが一つきりであつた。ところが、それを食つた良人は急に病氣になつて故郷に歸つたが、段々重つて九日の後に死んでしまつた。姑やラファルジの友だちは夫人が怪しいと睨んだので、遂に夫人は逮捕され裁判され、死體解剖

の結果、砒素中毒とわかり、毒殺者として終身懲役に處せられたのである。が、その實ラファルジの雇つて居た助手のバルビエの仕業であるらしかつた。といふのは、バルビエは菓子の小包が發送されると共にバリーへ行き、ラファルジについて歸つて來てから、ずつと看護し、又平素夫人を非常ににくんで居たからである。彼女は十二年の後赦免されたが、その後二三ヶ月して死んだ。

メープリック夫人もやはり、夫人を砒素劑で毒殺した廉によつて一八八九年、裁判され、その結果、死刑に處せられたが、世間の人々が承知しなかつたために一等を減せられて終身懲役に處せられた。良人が死ぬ前に攝つた肉汁の中に砒素劑が混つて居たことが唯一の證據となつたのであるが、その實、良人には平素亞砒酸を嘔む習慣があつて、その肉汁の中へ亞砒酸を入れさせたのは實は良人自身であつた。そして、彼女はそれが亞砒酸であるとは知らなかつたのである。

泰西女賊傳

一

泰西の數ある女賊のうち、最も數奇な運命に弄ばれ、その一生が最もロマンチックな色彩に富んで居るのは、二人の女海賊、メリー・リードとアンヌ・ボニーであらう。二人は時を同じくして生れ、

十八世紀の初頭に活躍したのであるから、その傳記は、やゝもすると虚構の物語ではないかと疑はれるほどであるが、二人が實在の人間であつたことはたしかである。

メリー・リードは英國で生れた。母は若くしてある海員に嫁したが、その海員は結婚後程なく航海に出たまゝ生死不明となつた。その時彼女はすでに妊娠して居て後に男の子を擧げたが、程なく再びふとしたことから妊娠したので、恥かしさに堪へかねて田舎にひそみ、そこで女の子を生んだ。すると偶然にも男の子が死んだので、生き残つた女の子を男の子のやうに装はせて世間體を取り繕つた。この女の子が即ちメリー・リードである。

かくてメリーの母は、三四ヶ年田舎で暮したが、持つて來た金が盡きたので、ロンドンの良人の家に寄食しようとした。姑をあざむくことは頗る困難であらうと考へたが、背に腹はかへられぬ思ひで危険を冒してやつて來ると、案外にも姑は祕密を發見しなかつた。

だんくメリーが成長するに連れ、母はメリーに事情を言ひふくめて、祕密を保つ様に訓練した。ところが姑の死と共に生活費の出どころがなくなつたので、メリーが十三歳になつたとき母はメリーをあるフランス婦人の給仕に雇つてもらふやう頼みこんだ。さうして一兩年の長メリーは給仕をつとめたが、だんく男らしく成長するうちに、軍艦の乗組員を志願し、暫らく勤務してからフランスに行き、そこで、義勇兵として戦地の歩兵隊にはいつた。後更に騎兵隊に入り、大に勤勉したの

で、すべての士官に尊敬された。

ところが同じ騎兵隊に、一人の美貌のフランダース人が居て、彼女はいつの間にか、この男を戀するに至つた。さうしてそれと同時に彼女はいまゝでの勤勉な兵士でなくなり、服務を怠りがちになつた。いまゝできちんと掃除された武器には塵埃がたまつた。而も、彼女の戀人が行軍に出ると、彼女は命ぜられもしないのに危険を厭はずつて行つた。

けれども誰一人彼女の不思議な行動を理解するものはなかつた。みんなは彼女が氣が違つたのであらうと思つた。さうしてこのやうな状態が暫らく續いた後、彼女は戀人と天幕生活をして居るある日わざとらしくしないで、彼女の祕密を戀人に發見せしめたのである。

戀人は尠なからず驚いたが、同時に頗る歡んだ。その當時は軍規が一般に亂れて居たので、彼は彼女をミストレスとして獨占し得ることを歡んだのである。けれども彼女はミストレスとなることを拒んだ。正當な妻となるのでなくては厭だといつた。で、たうとう、彼は正式に結婚するやう申出たのである。

二人の兵士が結婚するときいて、他の兵士たちは大騒ぎをし出した。數人の士官は好奇心から式に列した。すべての兵士は花嫁に贈り物をした。さうして二人は間もなく除隊の許可を得て、ブレダ城のほとりに料理店を營み、兵士たちを顧客として大に繁昌した。

若し、彼女がその儘順調に暮して行く事が出来たならば、彼女は海賊とはならなかつたであらう。が、この幸福は長くは續かなかつた。即ち、彼女の良人は死に、戦争は終つて、ブレダの駐屯軍は解散した。彼女はやむを得ずそこを引き拂つてオランダに行き、再び男姿になつて歩兵隊にはひつたが思はしいことがなかつたので、程なく西インド行きに海員として乗り込んだのである。

ところが航海の途中で、その船は英國の海賊船に襲はれた。乗組員のうち、たつた一人メリーだけが英國人であつたので海賊は彼女を自分たちの船にとどめた。そこで彼女はやむなく海賊たちと生活して居たが、程なく西インド諸島の海賊特赦令が出たので、彼女の仲間は自首して上陸した。けれども、ちぎりに生活に窮するに至つたので、キャプテン・ロージャースが西班牙人征伐船を組織したのを機として、彼女は數人の、もとの仲間と志願して許されたのである。

ところが、船に乗り込んでから、彼女等は司令官に反抗してもとの海賊となつた。彼女にとつては眞面目な仕事よりも、海賊の方が遙かに面白かつたのかも知れない。彼女は後に裁判を受けたとき、海賊といふ仕事の恐ろしさにふるえたことを述べたが、證人の言によると、いつも他船に襲はれたとき、彼女と今一人の女海賊アンヌ・ボニーとだけが甲般に残つて指揮したさうである。若し、他の乗組員が躊躇して出て来なければ、彼女たちは自ら拔劍して相手を斬り殺した。尤も、この證言を彼女は否定したが、兎に角、彼女が勇敢であつたことは争はれない。さうしてそれがため誰一人彼女が女

であらうとは思はなかつたのである。

處が、遂に、彼女が正體を割らねばならぬ時が来た。彼女のすつきりとした男振りに、同じく男姿になつて居た前記のアンヌ・ボニーが心を寄せて、「實は私は女です」と、相手も女だとは知らず、メリーに向つて己が秘密を告げながら、戀を打ちあけたからである。そこでやむなくメリーも己が秘密を告げると、アンヌは少なからず絶望したが、如何ともし難い運命であつた。

すると、二人の親密を見つけた船長ラツカムは、アンヌの情人であつたため、メリーに對して嫉妬を感じアンヌに向つて、若しメリーと親しくするならば、メリーの咽喉笛を切つてしまふとおどしつけた。そこで、アンヌは、やむなくメリーの秘密をラツカムに告げたのである。これをきいてラツカムも納得し、メリーの秘密を他の乗組員に知らせぬやうに用心した。

けれども、運命は、又もや彼女に戀心を起させ、それによつて、彼女はその正體を裏切らねばならなくなつた。彼女の乗込んだ海賊船は、主としてジャマイカその他の諸島へ往復する英國船を襲つたのであるが、その船に乗つて居る技術家や、又は役に立つ人間は、之を擒にして船にとめるのが例であつた。さうした人々の中に、特にメリーの眼をひいた一人のやさ男があつた。彼女は何とかして男に己が正體をさとせたいと苦心したが、男はなかなか察しが悪かつた。そこで、彼女はたうとう辛抱しきれずに、ある時、男に向つて、そのふつくらとした白い乳房を見せたのである。

さすがにこれを見た男は好奇心にかられて問ひつめた。そこで彼女は男に秘密を打ちあけたのである。戀は始まつた。さうして二人の熱はだん／＼高まつた。ある日、ふとしたことから男は海賊の一人と争つた。海賊の習慣として、二人は決闘することになり、ちやうど船がある島に碇泊中であつたから、上陸して運命を決しようとした。これを知つたメリーは内心に少なからず不安を感じた。自分の生命よりも戀人の生命の方が大切なやうな氣がした。で、彼は戀人に代つて相手と決闘しようと思ひ、二時間前に相手をおびき出して、殊勝にも劍とピストルで殺してしまつたのである。

さうして二人は夫婦になつたが、程なく逮捕されるに至つた。裁判で彼女は人々から大に同情されなければ、有罪の判決が下された。ちやうどその時彼女は妊娠中だつたので、死刑の執行は分娩の後まで猶豫されたが、判決後程なく病氣に罹り獄中で死んだ。

二

アンヌ・ボニーはアイルランドのコークに近い町で生れ、父は代言人であつた。彼女は父の正式の子ではなかつた。さうして、彼女が生れるについて、こゝに一條の小説的な物語りがある。

代言人の夫人は分娩後、肥立ちがわるく、數哩離れた良人の母の家に寄寓することになつた。あとに残つた代言人は女中と二人で暮して居たが、その町の鞣皮工をして居る青年が彼女に付きまといつてよく代言人の家にたづねて來た。ある日女中が勝手に仕事して居る時、件の青年は訪ねて來たが、

ふと傍を見ると、銀の匙があつたので、まつたくの出來心から、そのうちの三本を、女中がむかふ向いて居る間にポケットにしのばせた。

女中は間もなく匙の紛失して居ることに氣つき、青年が盗んだにちがひないと思つて、青年に談判すると、青年がそれをきつぱり否定したので、彼女は警察へ訴へ出ると言つておどかした。これには青年も困つて、よくその邊をさがして御覽なさいと告げ、彼女が抽斗などをさがして居る間に、ひそかに隣室即ち女中の寢室にしのび入り、ベッドの敷布の下へ、盗んだ三本の匙をかくして置き、ひそかに逃げて行つてしまつた。

女中は、捜しても匙が見つからなかつたので、警察へ訴へ出た。これをきいた青年は、いづれ夜になれば女中が発見するにちがひないと思つて安心して居たが、三日過ぎても四日過ぎても警官が自分を搜索して居るときいて、扱は女中は、匙を発見しながら、こんどは自分で奪つて罪をこちらにさせるつもりがちがひないと思つた。

その時、代言人の夫人は健康を恢復して姑と共に家にもどつた。女中は直ちに匙の紛失を夫人に告げた。さうして、それを盗んだ青年はいまだに逃げかくれて居るのだと物語つた。

ところで、青年は、夫人が歸宅したことを傳へきいて、夫人の寛大な心に訴へるつもりで、すぐさまたづねてすべての事情をひそかに物語つた。夫人ははじめその話を信じなかつたが、とに角女中の

ベッドをしらべると、果して三本の匙が出て来たのである。

夫人は、その意味を解釋するに苦しんだ。ベッドの敷布の下にある以上、女中が氣附かぬ筈はないからである。そこで考へは、すぐさま女中が、そのベッドで寝たのではないといふ結論を生み、彼女は良人と女中とが怪しいとにらんで、大に嫉妬を感じはじめたのである。

さうすると、良人の女中に對するこれまでの態度に、怪しい數々のあつたことが記憶にうかんで来た。その上、彼女が四ヶ月振りに歸つたのに、良人が朝から用があると云つて餘所へ出かけたことも疑念を深める種であつた。

そこで夫人は一策を案じ、匙をそのまま、敷布の下に置いて、女中に命じて、お母さんが女中部屋のベッドに寝られることになつたから、敷布をかへなさいと告げた。女中は匙を發見して大に驚いたが、今更告げる譯には行かなかつたので、そのまま己がトランクの中へ入れてしまつた。

夫人は、扱はいよく怪しいとにらみ、その夜女中のベッドに寝た。寝たけれども、眼は冴えたと、幾時間かの後足音がきこえて、誰か部屋にはひつて來たと。

「メリー、起きてる？」

女中の名を呼んだのはまさしく良人の聲であつた。

彼女は恐ろしさに返答が出来なかつた。良人はやがてベッドに近づいた。

あくる朝、良人をそのベッドに眠らせたまま、彼女はしのび出て、姑に委細を告げた。良人は良人で何喰はぬ顔してベッドを抜けて出て行つた。夫人はくやくしてならず、女中に復讐すると、女中が匙を盗んだ旨を警察へ訴へた。その結果女中のトランクから匙が發見されて女中は逮捕された。

良人は晝頃外から歸つて、ゆうべとまりがけで外出して居たやうに見せかけた。女中が逮捕されたときいて良人は夫人と激論した。姑は夫人に加勢し、その結果、姑と夫人は再び、姑の家に戻つた。その後二人は一度も一しよにならなかつた。

女中の裁判は凡そ半年も續いた。その結果無罪の宣告を受けたが間もなく女児を分娩した。

ところが代言人を非常に驚かしたことは夫人が妊娠したことである。過ぐる夜女中の身代りになつたことを知らないで、てつきり密夫をこしらへたのであらうと判断した。夫人は皮肉にもその時男女の双生児を生んだのである。

程なく姑は病氣にかゝり、息子に細君と仲なほりするやうにすゝめたが、息子は頑としてきかなかつたので、死に際に遺産を夫人とその子たちに残し、代言人には何も與へなかつた。

これには代言人も閉口した。すると、さすがに夫婦の情愛で夫人は金をみついでやつたが、五年ほどの後良人は女中との間に儲けた女の子が可愛くてならず、自分のところへ引き取り、男の姿をさせて、親戚の子を養ふのだといつて世間體をつくらつた。

書くことが出来ると思ふ。海賊といふものそのものが、すでにロマンチックなものであるが、その海賊のうちでも、この二人の生涯は、不思議なほどロマンチックであるといつてよい。

夫人はこのことをきいて、人に頼んで、その男の子の正體をさぐらせると、女中との間に出来た子だとわかつたので、金の仕送りをやめた。すると良人は怒つて、而當てに女中を家に引き入れた。それがため世間の信用を失ひ、代言人として、誰も依頼に来るものがなくなつた。で、家財を賣つてコークに行き、女中と娘とをつれ、カロライナに渡航したのである。

そこで彼は植林をやつて成功したが女中が死んだので、娘と二人暮しになつた。その娘が即ち、後の女海賊アンヌ・ボニーである。彼女は生れつき氣が荒く、後に父の意にそむいてある海員と結婚した。その時船長ラツカムの見染めるところとなり、良人を捨て、ラツカムの許に走り、男装して海賊船に乗り込んだのである。例の特赦令で一旦自首して許されたが再び海賊となつて、その時、前記のメリー・リードと一しよの船に乗込むことになつたのである。

かくて彼女は遂にラツカムと共に逮捕され、裁判された。ラツカムが死刑に處せられる時、彼女は近づいて言つた。

「悲しいけれども、男らしく暮して来た以上、犬のやうな死に方はして下さるな」

彼女も、ちやうどその時妊娠して居たので、刑の執行を猶豫され、その後、特赦が続いて、遂に死を免れたが、その結果彼女の運命がどうなつたかは不明である。

以上が二人の著名な女海賊の略傳であるが、想像力の豊富な人ならば、これからすばらしい物語を

昭和四年九月二十日印刷
昭和四年九月二十三日發行



發兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目六番地

小酒井不木全集 第七卷

著者 小酒井不木

發行者 山本三生

印刷者 君島潔

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

東京市小石川區久堅町一〇八番地

改造社

振替東京八四〇二番
電話芝(41) 四三二一番

兩角製本

——第七卷終——





